

# 医科歯科大 むかし噺

東京医科歯科大学との縁が深い先生方に、  
心に残った思い出の出来事やエピソードを  
伺いました。

## むかし噺 其ノ一

### 海外有名大学との交流と 新しい医学教育の基盤を構築



東京医科歯科大学  
名誉教授  
**廣川 勝昱** (ひろかわ・かついく)

1939年東京都生まれ。1964年東京医科歯科大学医学部卒業、大学院病理学修了後、1972年～1974年にアメリカ国立衛生研究所(NIH)に留学。帰国後病理学助手、助教授を経て、1981年～1994年、東京都老人総合研究所に勤務。1994年に本学第二病理教授に就任。第19代医学部長(2001年～2004年)、副学長を歴任。定年退職後、本学名誉教授。人の免疫機能を定量的に測定する株式会社 健康ライフサイエンス、大学発ベンチャーを2006年に設立。近著に『自分の免疫力を知る方法～毎日を快適に過ごすために』(あさ出版)。

#### 本学に入学した動機と病理学を志したきっかけ

小学生時代に湯川秀樹博士に憧れて物理学者になりたいと思っていましたが、東大理学部受験で化学の最後の

一問をまるまる見過ごして答えず提出し、見事に落第し、当時2期校であった本学医学部進学課程に入ってきたという経緯があります。入学後はちょうど教養部が国府台に出来上がる直前でバタバタしていたことと、続いて安保闘争が始まり、学生デモに頻繁に駆り出され、落ち着いた大学生活はできませんでした。しかし、解剖の実習だけはかなり真面目に行われていたのと、当時解剖学助教授であった三木先生の間味あふれる講義は学生に評判で、私も未だに記憶しています。当時は、教養課程を含めた6年間とインターンを終えてから、医師としての修練のスタートという制度で、学生も試験をパスすればよく、良い成績を取ろうという学生は少なかったように思います。よく言えば、のんびりと学生生活を楽しめたのだと思います。私自身は、このまま臨床医になるか、それとも研究者の道を選ぶかと悩んでいるときに、基礎と臨床の中間点のような「病理学」という学問に出会いました。

私のこの選択に影響を与えてくれた恩師は、当時、生

学の教授で電気泳動学や農村医学の先駆者の宮本璋(みやもと・あきら)先生で、医学部長を務めておられました。当時はまだ戦後の食糧難を引きずっており、宮本先生の研究室に行くと必ず美味しいものを食べさせてもらえることが魅力でもありました。ご馳走を食べながら、「とにかく君たちはちゃんと勉強しなければならないよ。研究論文は英語で発表するように!」としっかり教育して下さったことも、研究に対する真摯な姿勢を身に着ける動機になりました。インターンを終えて、進路を探すときに、外科病理や剖検病理で、臨床と深く関わり、研究をし易い環境があり、宮本先生の教えを実現できそうところが病理学だったのです。

#### アメリカ留学から老人研、医学部長になるまで

病理学教室に入ってから、宮本先生のアドバイスに従い、英文の論文をいくつか書きました。次に、一流の国際雑誌に、興味ある論文を発表しているボスに、既に書いた論文と共に「英語のラブレター」をいくつか送り、研究させて欲しいと頼んだのです。その結果、アメリカ国立衛生研究所(以下、NIH)のマキノダン先生のところへ、免疫系の老化研究をすることになったのです。留学してわかったことは、やはり日本は島国であり、国際的な研究者になるには、海外に出ることは必須だということです。こうして、留学し、研究者としての成長の階段を一步一步確実に昇れたのも、本学の先生方のサポートする雰囲気があったからだだと思います。私自身も教授になってから、学生たちに「日本語で論文を書いて人も脈は広がらない。英語で論文を書いて世界に飛び出していきなさい」とアドバイスし続けました。

こうしてNIHに留学し、2年余りを有意義に過ごしました。帰国後はしばらく本学に勤務し、その後は東京都老人総合研究所(以下、老人研)に転任しました。当時の東京都の研究所は、予算も比較的余裕があり、研究員や助手にも恵まれていました。また、外国人研究者の枠もあり、マンション付きで、海外から優秀な若い研究者を老人研に招いて新しい研究にとりかかることができました。私は、免疫系の老化研究を主題として、12年あまり研究に没頭できました。

その後、1994年に母校に戻って病理学教室の教授に就任し、2001年から2004年まで医学部長を務めました。本学は東京大学と比較されることが多く、臨床を頑張るだけでなく、質の高い論文制作も常に要求されていました。さらに私の医学部長時代はちょうど、モデル・コア・カリキュラム(2001年3月公表)、共用試験(医学生が臨床実習に

進む前に必要な基礎的な知識や技能を評価するための試験)、CBT(コンピューターを使用して行う試験形式)、およびOSCE(医学生の臨床技能を評価するための新システムで、2002年から試行、2005年から正式実施)の時代で、2004年からスタートする国立大学法人化の準備期でもありました。これらのモデル・コア・カリキュラム作成とCBTの作成は、佐藤達夫医学部長時代から始まり、本学が中心となり、東京医科歯科大学に全国の教育担当教授が月に2度以上集まり、文部科学省からは課長補佐が参加し、秘書的役割を担ってくれました。この集まりは2～3年続き、夜12時まで働く、つらく、しんどかった記憶があります。

#### なぜ医学教育に全力を尽くしたか

医学部長に就任して最初に宣言したのは、「診療、研究、さらに教育まで、この3つに全力を尽くしてほしい」ということで、まず自分の宣言を有言実行しようと思い、働き方改革のない時代でしたので、朝7時から夜11時頃まで身を粉にして全力で働かざるをえませんでした。

なぜ医学教育に全力を尽くす必要があったのかを振り返ってみると、私が学生だった1970年代と比べて医学は技術的に進歩し、学生が学ばなければならない項目が飛躍的に増えたことだと思います。一例をあげれば、1970年代には画像はX線だけでしたが、その後CT、MRIの著しい発展がありました。そのため、私が医学部の学生に望んだことは、将来の成長の基盤を培うことでした。医学部の講義を聞いて、知識を蓄えるという形式では、もはや成り立たず、たくさんの科目を学びながら、それが臨床でどのように互いに関連するかについて、頭で考えて体を動かしながら学んでいく必要がありました。医学部の教育では覚えることが多いのですが、考える習慣を身に付けることも重要です。そうすると、講義を聞くよりは、小人数によるグループ学習が重要だと考えました。そして、可能であれば海外実習を学生たちに受けさせてあげたいと思いました。

#### ハーバード大医学部との交流

この頃、国内では「医学教育モデル・コア・カリキュラム」の作成が終わり、本学を中心に、共用試験の作成とOSCEの調整が進行していました。しかし、これらは日本全体の医学・歯学教育の底上げを図るためのもので、本学としては、その上を狙う戦略が必要だったのです。当時の鈴木章夫学長もハーバード大学医学部(以下、HMS)で臨床実習する機会を持つことを提案しており、さらに大学として経済的援助もするというお考えだったので、2001年に当時教育担当教授であった田中先生、麻生先生ら、有志の



大山喬史学長(当時)よりベンチャー称号証書を授与される  
廣川勝彦先生

第1回リーダーシップコースの派遣前に  
学長室で行われた結団式

先生方数人と共にボストンに飛んで、HMSを視察しました。

当初はHMSの教育システムを丸ごと導入することを勧められましたが、議論を繰り返した結論として、HMSの医学教育のエッセンスの中で、本学に合うものを取り入れ、独自のカリキュラムを作り上げるという方向になりました。そして教員の派遣、教員の招へい、学生の派遣という3つの柱を構築するべく、皆で汗を流しました。一方で不満が残ったのは、この契約がHMSにお金を払って教育を依頼するという内容で、こちらからハーバードに学生を派遣しますが、向こうから学生は来ないという形で、望んでいた相互交流の姿ではありませんでした。

### インペリアル・カレッジ・ロンドンとの交流

私はできることならば、海外の有名名門大学と本学が同じ条件で、学生の交換留学をしたいと強く考えていたときに、英国のインペリアル・カレッジ・ロンドン(以下、ICL)との契約の話が急浮上しました。そして現在学長である田中雄二郎先生の同級生であり、ICLで教授をされていた高田正雄先生のご尽力のおかげで、学生交換条約を締結することができました。私は教育担当教授であった田中雄二郎先生を含む3人の先生と共に、ロンドンに行き、条約文書にサインした事を覚えています。また、学生に研究思考も持たせたいという気持ちで、MD・PhDコースも始めました。これは学生時代に研究体験をさせようという意図で作られたものです。このコースの問題点は大学院の入学金と半期の授業料でしたが、医科同窓会の資金援助により、スタートすることができました。

その後、海外の大学との連携はチリ大学、チュラロンコン大学なども行われ、さらなる発展方向に向かっていきました。学生時代から、海外の大学で学ぶ機会ができれば、学生にとって大きな体験となり、本学の発展に大き

なプラスになると考えたのです。

また大学院重点化の際には、優秀な研究者を日本中から集めるために、人材確保にも力を注ぎました。本学は御茶ノ水という都心の一等地にあるため、そこに惹かれて着任して下さる先生が多かったと思います。

東京医科歯科大学は言うまでもなく医療系の大学ですが、医師、歯科医師として、患者さんを診る場合には、医療系の知識だけでなく、文系の素養も必要であることは、誰でも思うことです。当時の学長であった鈴木先生は、東京工業大学、一橋大学、東京外国語大学との連携を模索されていました。その結果、四大学連合が2001年3月に結成されました。私は、2001年4月から医学部長になり、その対応で、忙しかったのを覚えています。それから20年余りたって、2024年10月から本学と東京工業大学とが統合して、東京科学大学となることは、非常に感慨深いものです。

この新しい大学は、いろいろな苦難や戸惑いがたくさん待ち受けているとは思いますが、御茶ノ水・湯島キャンパスの魅力は失うことなく、従来にない新しい発展を遂げるものと信じています。

以上のように、取り組むべき課題が山積して多忙な医学部長時代でしたが、本学には実に個性豊かでアクティブで協力的な教職員が多く、私が医学部長をこなし切れたのは、周囲の協力があったからだ、心から感謝しております。

大学退官後は、病理診断学と共に、免疫系の老化を中心とした研究に没頭する時間を持つことができました。その中で、血液中のリンパ球を用いて免疫力を定量的に評価する方法を発明して本学の特許として登録し、2013年に大学発ベンチャーの称号をいただいて、現在も現役で研究とベンチャー企業の経営を行っています。

むかし噺 其ノ二

## 母校の仲間と道を切り開き スポーツと医学で社会に貢献



日本スポーツ政策推進機構  
理事長

河野 一郎 (こうの・いちろう)

1946年東京都出身。1973年東京医科歯科大学医学部卒業後、1977年から筑波大学で勤務。1999年筑波大学教授、2010年より筑波大学学長特別補佐・特命教授、ソウルオリンピックより3大会連続で日本選手団のチームドクターを務める。国際ラグビー連盟理事、日本スポーツ振興センター理事長、ラグビーワールドカップ2019組織委員会事務総長代行、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副会長、日本アンチ・ドーピング機構会長、世界アンチ・ドーピング機構委員などを歴任。現在、日本スポーツフェアネス推進機構代表理事。日本スポーツ政策推進機構理事長。

### 第一内科入局がアンチ・ドーピングの素地

私は海の近くにある小中高一貫の湘南学園でのんびり楽しく育ち、父が勤務医だったので、他の選択肢を考えず、自然な流れで本学に入学しました。

入学後はアメフト部に入部したくて探しましたが無く、代わりにラグビー部に入って瞬間にラグビーにのめり込んだのが、スポーツ医学の道を歩むきっかけとなりました。当時は学生運動が盛んだだったので、学校行事はほとんど中止で卒業式もなく、卒業証書は事務室でもらったと記憶しています(笑)。

卒業後はラグビー部の先輩だった伊藤真一先生の影響で、第一内科(現在の膠原病・リウマチ内科)に入局しました。当時、第一内科が網羅するのは、循環器、呼吸器、消化器、血液、膠原病、リウマチ、アレルギーなど幅が広く、「偉大なジェネラリスト」となる教育と経験を積むことができ、これが後にスポーツ医学、そして「アンチ・ドーピング」を志すための素地やエッセンスとなったように思います。

また医師になりたての頃、今川八東(いまがわ・はっさく)先生という本学の先輩に出会ったことも大きな収穫でした。当時、感染症治療の最前線の病院だった墨東病院で、感染症部の部長だった今川先生はラッサ熱、チフス、感染性腸炎など、発展途上国で流行し、国内に感染を広げる「国際化した感染症」の研究を行っていました。関心を持つと、世界中どこにでも飛び込んでいく医学者で、1982年に発生したイエメンアラブ共和国地震発生後には、日本調査団の団長として現地入りして活躍されておられました。

### 創立間もない筑波大学でスポーツ医学に出会う

筑波大学が1973年に設立され、附属病院が開院した

1977年に、私は筑波大学附属病院の内科に赴任しました。上司は本学第一内科の先輩である柏木平八郎教授でした。柏木教授はアメリカナイズされた方で、「やることさえやっていたら好きなことに没頭していい」という、当時では珍しい自由主義の方針を取ってくれました。おかげでチーフレジデントとして新しい病院づくりや医学教育改革に取り組みつつ、恵まれた筑波大学キャンパスのグラウンドでラグビーに没頭しました。他方で、スポーツ活動が免疫に与える影響に関する研究にも取り組みました。このことが評価され2021年に第24回秩父宮記念スポーツ医・科学賞を受賞いたしました。

大好きなラグビーの世界では、1997年に日本ラグビーフットボール協会の強化推進本部長に就任、日本代表ヘッドコーチとして平尾誠二氏を招へいして当時は他競技では行っていなかったプレーヤー育成プログラム「平尾プロジェクト」を創設しました。1999年のラグビーワールドカップでは、日本選手団の団長も務めました。また、同年、筑波大学人間総合科学研究科の教授に就任しました。その後、国際ラグビーフットボール連盟理事となり、2019年のラグビーワールドカップ日本招致と7人制ラグビーのオリンピック種目復帰のために汗を流しました。ラグビーに関する医学的な研究では、1990年にバミューダで開催された国際医学会で世界のラグビー界で最初に脳しんとうに関して、エビデンスを基に警鐘を鳴らし、これが注目されて脳しんとうに関するルールが見直されるきっかけとなり、ヘッドギアやマウスピースの装着が普及していきました。

### 世界で日本の不動の地位を確立

話が前後しますが、スポーツ医学におけるアンチ・ドーピングの重要性を実感したのは、1988年開催のソウルオリンピックの際にベン・ジョンソンのドーピング騒動が起きたことです。私は日本選手団のチームドクターとして帯同しており、一国の威信をかけて準備をした大会なのに記憶に残っているのはドーピング騒動…という悲しい結末は決してあってはならないと思ったのです。そこでソウル大会、バルセロナ大会、アトランタ大会と3つの大会のチームドクターを務めながら、各国で独立したアンチ・ドーピング体制の構築が進む中で、日本にもこの体制づくりを早急に進めるべきと考えました。

1999年に世界アンチ・ドーピング機構(WADA)が設立されたことで、それまで各国やスポーツ種目でバラバラだった禁止物質や禁止事項を改めて、統一したルールが作られるようになりました。

設立当初から私は委員としてまた日本政府は常任理事

国としての実績もあり、2001年には財団法人日本アンチ・ドーピング機構（以下、JADA）を設立することができました。これにより、日本国内で、ドーピング検査、教育・啓発活動など、世界標準のアンチ・ドーピング活動を可能にする体制が整備されました。同年、私は日本オリンピック委員会（JOC）理事に就任し、日本の競技力向上中長期戦略GOLD PLANを策定し、国立スポーツ科学センター、ナショナルトレーニングセンターの設立にも深く関わりました。2002年ソルトレイクシティー大会、2004年アテネ大会、2006年メルボルンで開催された英連邦競技大会ではWADAのインディペンデント・オブザーバーを務めました。

実は、JADAの体制整備にあたって、本学の卒業生2人に大変お世話になりました。1人は本学から日本医科大学薬理学教授になった鈴木秀典先生で、私の後任として、長くJADAの会長を務めていただきました。鈴木先生の専門分野は神経薬理学で、この知識がスポーツ界の統一規則である「世界アンチ・ドーピング規程（Code）」を踏まえた各種規程の策定に大いに活かされ、鈴木先生は世界的に有名なアンチ・ドーピング研究の第一人者として活動されておられます。鈴木先生もラグビー部OBです。現在も鈴木先生と一緒に、アンチ・ドーピングに精通した薬の専門家を育成し、アスリートが安心して薬について相談できる「公認スポーツファーマシスト認定制度」の普及に取り組んでいます。現在1万2千人を超える薬剤師の方が資格を取得されております。

もう1人は、現在も本学理事を務める廣川和憲先生です。廣川先生は東京大学薬学部を卒業後に第一製薬（現在の第一三共）株式会社に勤務し、その後本学医学部を卒業して医学博士を取得し、インペリアル・カレッジ・ロンドンにも留学経験がある、医学・薬学の知識、経営手腕、そして国際性を併せ持つ真の国際人で、アンチ・ドーピングの国際舞台でも活躍しておられます。

### 医科歯科人脈の優しさと頼もしさ

1961年に制定されたスポーツ振興法を50年ぶりに全面改定し、スポーツに関する基本理念とスポーツに関する施策の基本になる事項を定めた「スポーツ基本法」の制定の際にも超党派の議員で構成されたプロジェクトチームのアドバイザーボードの座長を務めました。紆余曲折がありましたが、2011年に公布されました。2013年の東京大会の決定を受け、2015年にはスポーツ振興とスポーツに関する施策の総合的な推進を図るために「スポーツ庁」が設置され、現在は本学の特任教授であり、2004年のアテネ大会

の男子ハンマー投げで金メダルを獲得した室伏広治先生が2代目長官を務めています。

2015年に認定がスタートした「スポーツデンティスト」資格認定の準備にも大山喬史元学長に大変お世話になりました。実は大山先生は本学のラグビー部出身で、ラグビーと母校がつないでくれたネットワークが大いに役立ちました。歯学部と同級生で歯科同窓会長の浅野正樹さんにも協力いただきました。

また、2016年の東京大会招致計画を立案する際には、大会の後方支援病院として、本学卒業生である、都立駒込病院の坂巻壽病院長（当時）に協力していただきました。その後、2020年東京大会招致の際にも、吉澤靖之前学長にお願いして後方支援病院となっただき、2021年の東京大会開催時には、田中雄二郎学長にサポートしていただきました。他にも本学医学部保健衛生学科教授の芝紀代子先生に検査関連のボランティアを集めていただき、同級生の放射線診断科の齋田幸久先生には選手村の放射線診断部門の責任者を務めてもらいました。歯科診療部門は、ラグビー部OBの近藤尚知先生に準備から大会時の診療まで仕切っていただきました。

東京大会では、私が制度の創設期に深くかかわった公認スポーツドクター制度や公認アスレティックトレーナー制度で養成された全国のドクターやトレーナー仲間が会場の医事班として力になってくれました。また、公認スポーツファーマシスト認定制度で資格認定をうけた薬剤師の方々が大きく貢献されました。東京大会後に、ファーマシストの方からもっと活動の場を広げて社会貢献をしたいという強い要望に応え、本年度からスポーツファーマシー登録制度も立ち上げております。

また、東京大会のレガシーとして、医学部、歯学部のモデル・コア・カリキュラムにスポーツ医学を導入することができましたが、嶋田昌彦教授（ラグビー部OB）をはじめ医科歯科のネットワークなくしてはできませんでした。

独立行政法人スポーツ振興センターの理事長として、国立競技場やナショナルトレーニングセンターの運営、そしてスポーツ振興くじ（toto）の売り上げ拡大などに携わることができたのも良い経験でした。

私が自分自身で難題を見つけてしまったり、誰かに難題解決を依頼されたりすると、常に医科歯科大人脈、ラグビー人脈、そしてスポーツ人脈がサポートしてくれて、新しい道が切り開かれていきました。私にとって宝でもあるこうした仲間は、私が医科歯科大学に入学しなければ出会えなかった人々であり、私の人生を振り返りながら、医科歯科大学に進学したことが本当に良かったと感じています。

2024年10月に東京工業大学と統合し、本学は東京科学大学となります。私自身は筑波大学で「大学の移転と名称変更」を経験しているので、驚くべきことではなく、むしろ名前が変わり、組織が変わることで、新しい進化を遂げるものと確信しています。常に前を向いて、よりよい明日を築くために自分は何ができるのかを自問自答しながら、その解を学び舎の旧友や、新しく出会う仲間と一緒に、道なき道を切り拓いていく…そう考えて、皆で手を携えて前進していきましょう。

### むかし噺 其ノ三

## 大学病院での看護職すべてを経験できたのが宝



元医学部附属病院・歯学部附属病院  
看護部長  
落海 真喜枝（おちうみ・まきえ）

1947年広島県生まれ。1968年に東京医科歯科大学医学部附属看護学校卒業後、医学部附属病院に勤務。1982年に看護部長（脳神経外科病棟）、1985年より本学医学部附属看護学校へ専任教員として異動。1991年3月の閉校に伴い、医学部附属病院へ看護部長（内科・胸部外科混合病棟）として異動。1994年より医学部附属病院副看護部長、2000年に歯学部附属病院看護部長、2004年から医学部附属病院看護部長となり2008年まで勤務。

### 医学部附属看護学校に入学した理由と学生生活

幼い頃から母に、「これからの時代は、女性も手に職をつけたほうがいい」と言われていたので、自分の性格上、デスクワークよりも体を動かしてアクティブに現場で働きたいと思い、看護師という職業を選びました。

私は医学部附属看護学校の第15期生として入学しました。本学は都心の一等地にあります。敷地が限られていたために、病院の増改築が度々あり、しょっちゅうどこかが工事中で、私自身も校舎の引っ越しを2回ほど経験しました。

当時の看護学校は全寮制で授業料が無料で、逆に毎月の手当てが物品で支給されていました。授業は3分の2が実習で、1年生から三角巾と予防衣を着て、病院という未知の空間に早く馴染めるように、また貴重な労働力としても期待され、働きながら実践的に看護を学びました。その一方で、学術的な面も充実しており、特に一流の先生方が講師として教鞭をとってくださって、基礎医学を教えてもらったことは、とても貴重で贅沢な時間だったと思います。解剖学の新島迪夫先生など、印象に残っている講義もたくさんあります。若い女性ばかりの看護学校の授業に来るのを、

楽しみにされている講師の先生方もいらっしゃいました。学生寮は、初めは元結核病棟を改修した田安寮で、1年生は6人部屋の病室を使っていました。お化け屋敷のような古い建物で、時々ネズミやゴキブリに遭遇するような環境でした。2年生で御茶ノ水駅近くのモダンな茗溪寮に移り2人部屋で安心したものです。

### 美術クラブ、運動会、戴帽式…青春を謳歌…そして就職

看護学生時代は美術クラブに所属していました。医学部や歯学部の学生さんと一緒に活動して、白馬に夏合宿に行った楽しい思い出もあります。国府台の教養部のキャンパスで全学部長が集まって「合同運動会」に参加した記憶も鮮やかに残っています。素敵な先輩が走る姿を仲間たちと一緒に大きな歓声をあげながら応援したりして、まさに青春でした。

1991年3月に看護学校が閉校になるまで、感動的なイベントである「戴帽式」は続けられましたが、自分自身の戴帽式のときも、卒業後に教官になって後輩を送り出すときも、喜びと身が引き締まる思いでいっぱいになりました。

看護学校を卒業後は、ずっと本学の病院で、内科、外科などのさまざまな診療科病棟で働きました。医学部附属病院と歯学部附属病院の両方で看護部長を務めさせていただいたのも、2つの病院の特色、共通点、相違点などに気が付くことができ、いい経験でした。

### 変化し成長する病院のために、看護部の組織改革と人材確保

1991年に医科A棟、1996年に医科B棟が竣工したため、看護師長として、また副看護部長として病棟移転の準備や実施に携わりとても大変な日々でした。

2004年、医病の看護部長就任後は、2007年のERセンター開設に向けて、看護師を100人近く増員する必要性がありました。そのため、毎年副看護部長達と全国の看護大学や看護学校をリクルートに回ったり派遣看護師の導入を検討したりして、何とか開設に間に合わせる事ができ



Bloom! 増刊号の  
対談記事より  
(2006年撮影)

した。この間、必要人員数を計算した資料を作り、鈴木章夫学長（当時）や総務部長に何度か直談判した結果、予算を確保していただきました。その後も、何かと気にかけてくださり、感謝しています。

さらに病院はICUの増床やHCUの開設も計画していたため、その都度増員の必要があり、医病の看護部長としての4年間は人材集めに終始したと言っても過言ではありません。また、病院経営に直結する病床稼働率の向上、診療報酬改定に伴う在院日数の短縮、7:1看護配置基準取得に向けた取り組み等々、様々な課題に直面しました。そのため、看護部の組織改革を行い、総務・業務・教育担当の副看護部長3人をそれぞれトップとする看護師長達のグループを作り、メンバー間で協力し合いながら、日々の課題に取り組みました。当初、病院運営会議の席上で報告される毎月の病床稼働率について看護部の責任を問われることがありましたが、看護管理者会議で各病棟の稼働率をグラフ化して提示する等、データ化して問題提起することで、師長達の意識も変わり稼働率も向上してきました。数年後には看護部内で入院患者のベッド調整を行うようになりました。

退職後10年くらいは、医病と歯病には定期健診で受診する機会がありましたが、最近は殆ど行く機会がなく、久しぶりに訪れると浦島太郎のような気分になります。コロナ・パンデミックの際には、いち早く最前線で患者さんを受け入れて果敢に医療を提供する姿があちこちのテレビやネットニュースから流れてきて、とても誇らしい気持ちになりました。

今年喜寿を迎えましたが、退職後は健康維持のため、ほぼ毎日スポーツジムに通って、プールでアクアビクスなどをして楽しんでいます。また、ボランティアで、本学や東大の医学教育のための標準模擬患者（SP）をしたり、市民館の日本語教室や、スカイプで外国人に日本語を教えたり、自分でもオンラインで英会話を学んだりして、認知機能の維持にも努めています。

在職中から主治医になってくださったのが、初々しい研修医時代からよく知っている田中雄二郎先生なので、これからは陰ながら応援していきたいと思えます。

世の中は人間の想像を超えてどんどん変化しているので、「医や歯だけでなく人間全体を見るためには、サイエンスを究めよ」という新しい使命に向かっていく東京科学大学の行く末を楽しみにしています。

## むかし噺 其ノ四

# 1年で病院実習スタート。 部活で学生気分も楽しむ



東京医科歯科大学病院看護部  
副部長

井桁 陽子 (いげた・ようこ)

東京都生まれ。1987年東京医科歯科大学医学部附属看護学校卒業後、小児科病棟勤務。1993年外科病棟へ異動し、肝胆膵、食道・胃、大腸、血管外科を担当。1995年に副看護師長に昇格し耳鼻科・頭頸部外科、皮膚科、形成外科などを担当。2001年から歯学部附属病院へ異動。2002年に看護師長に昇格。2003年に医学部附属病院へ異動し、外科・救急病棟を担当。2009年、小児科病棟に異動。2013年、教育担当師長として看護部管理課へ異動。2016年内科病棟師長となり、呼吸器内科、消化器内科、糖尿病・内分泌代謝内科を担当。2018年副看護部長として看護部管理室へ異動。2020年、ベッドコントロールセンター設置に伴い、副センター長を兼任。

## ナイチンゲールに憧れて…

看護師を志したのは、小学校の教室に学級文庫があり、その中にあったフローレンス・ナイチンゲールの伝記本を読んだことがきっかけです。大学附属の看護学校が志望で、ご縁があって医学部附属看護学校に1984年に入学し、それから現在までずっと本学で働いています。

当時の看護学校は、医学部附属病院の屋上に建て増して作られた校舎で授業や実習が行われており、エレベーターが3台しかなかったので混雑し、遅刻しないようにハラハラして登校しました。医学部や歯学部の学生と交流する機会が多く、学園祭や運動会を楽しんだり、部活ではバレーボール部のマネージャーをしたりして、キャンパスライフを楽しめたのも、いい思い出です。授業は充実しており、一流の先生方の講義を聴けたことに感謝しています。印象に残っているのは、膠原病・リウマチ内科の宮坂信之先生の授業で、厳しかったけれど、免疫など基礎医学の知識が身に付きました。授業は実践力を身に付けるためのものが多く、2年生の夏休み以降は、ほとんど毎日病棟に



アセスメントチームの会議の様子。左下が井桁さん（2020年5月撮影）



アセスメントチーム会議で発言する井桁さん（2020年5月撮影）

行って、現場で看護を学びました。現場には実習指導者の先輩がいて世話をしてくれたり、怒られそうになるとかばってくれたりするのですが、時々シフトでお休みのときがあり、そんな日は病院に行く足取りが重くなりました。申し送りがスムーズにできないとすごく注意されて厳しかったのですが、怖い師長に怒られないようにするために先輩が作った対策ノートがあり、重宝していました。このように昼間は病院で実習し、夜は看護学を自習する…という日々が続きました。

その努力が実って戴帽式に臨んだ際には、先輩がナースキャップを被せてくれたり、サークルの仲間が花束を渡してくれたりして感動的でした。しかしそれが終わると、また厳しい実習の日々が続き、ナースキャップが邪魔に感じるほど忙しく働きました。

## 看護師の教育システム整備を推進

卒業後は、医学部附属病院でも歯学部附属病院でも働かせていただきました。歯学部附属病院に異動のときには、人事交流として師長・副師長数名が異動しましたが、転職したみたい病院の雰囲気や仕事のルールも違って、逆にそれが就職試験も転職も経験がなかった私にはいい経験になりました。また2007年のERセンター創設に向けて、病棟の改変という組織改革のような大きな仕事を経験しました。同時に教育委員会委員長として院内教育の企画・運営を経験できたのもこの頃で、後に起きるコロナ・パンデミックの際に役立ちました。2013年から3年間は、教育担当師長として教育キャリア支援室の立ち上げを行いました。学習意欲やキャリアアップ志向が高い後輩を教育指導者として指導することは、前を歩く看護師としての義務と考えています。当院の看護師のために教育システムの企画・運営・整備に携われたことはすごくやりがいがありました。学校で得た知識や技術をどのように工夫して患者さんの個別性に合った看護につなげていくか、そのために何を伝えていくかを大切に、本当に実践につながる研修、必要とされている企画を立案するように努力しました。

## コロナ対応で病院の結束が強まった

2020年4月には、看護学校の同級生である浅香えみ子さんが看護部長として着任し、着任のあいさつをする暇もなくコロナ・パンデミックに突入しました。私は各病棟の実務代表者が集まる重要な「アセスメントチーム会議」のメンバーとして、毎日のようにこの会議に出席しました。会議で情報を収集して、人手が足りない病棟に行くと、何

でも屋のように仕事を引き受けたり、看護スタッフに病院の方針を説明に行ったりしました。毎日、早朝から深夜まで働いていたのを鮮明に記憶しています。ベッドコントロールセンター副センター長として、東京都の要請に応じてコロナ患者を受け入れるベッドとスタッフをどうやって工面するか、毎日数字とにらめっこで、数字が決まったら病棟スタッフに事情を説明して、説得するという日々を3年以上続けました。お陰で話したことがない人がいないくらいに、職種に関係なく、いろいろなスタッフと話もできました。コロナ対応を経て、病院も一体化し、チーム医療の結束も強固になりました。まわりで支えてくださった皆様に深く感謝します。

少子高齢社会で人口も減少している中で、大学の統合は避けられないことだと思います。東京科学大学の理念に「幸せ」という言葉があり、看護の世界にいるものとして、とてもしっかりくる理念だと思いました。東京工業大学と統合したら、ぜひ私たち看護スタッフの煩雑で複雑でアナログな部分がまだまだ多い看護の現場を改善するシステムを開発してほしいです。

## むかし噺 其ノ五

# 先生との距離が近く 学びが多かった1期生



東京工科大学大学院  
臨床検査学専攻教授

栗原 由利子 (くりはら・ゆりこ)

1970年長崎県生まれ。1989年東京医科歯科大学医学部保健衛生学科検査技術学専攻に第1期生として入学。1993年卒業後、医学系研究科保健衛生学専攻博士(前期)課程を修了。助手、助教として勤務後、2024年より東京工科大学大学院臨床検査学専攻教授。専門は臨床化学。

## 検査技術学専攻に進み大学勤務となった経緯

私は長崎県出身で、小さい頃から歯科医師になりたいと思っていたので、本学は憧れの大学でしたが、残念ながら最初は、第一志望の本学ではない大学に進学しました。しかし偶然、医科歯科大学に「医学部保健衛生学科検査技術学専攻」が新設されるという新聞記事を見て、臨床検査のことはよくわかりませんでした。とにかく自分が憧れていた大学に呼ばれているような気がして(笑)、受験してみようと考え、運よく合格して無事に入学することができました。

入学すると1期生だったために、講義室や実習室もまだ整備途中の状態です。引越しまし移動が多く、場所が良く変わるので間違えないように講義教室を探して時間までに席に着くのが大変でした。また実習室が完成した時には新しい備品や機器の整備などをよく頼まれました。実習の前は必ず整備から始めるというのがセオリーでした。

また先輩がいなかったため、試験対策が大変でした。過去問などが一切ないため、先生の部屋を訪れては、何とか問題を聞き出せないか、先生との駆け引きが今となっては楽しかった思い出です。その分先生によく覚えてもらい、何かと気にかけていただいたと思います。先生方も、学生と一緒に新しい学科を作り上げていくという熱気があり、先生方との距離が近く、何でも話ができたことがとても良い刺激になりました。

博士(前期)課程修了後は前任の先生が辞められたことで、検査学専攻分析化学教室の助手として採用されました。その後大学院大学、法人化と国立大学が大きな変化を遂げる中、亀井幸子先生、芝紀代子先生、戸塚実先生と3人の教授に師事し、19年6か月という長い時間、東京医科歯科大学で臨床検査(臨床化学分野)教育に従事いたしました。

### 1期生としての貴重な経験が生きる

その後、東京工科大学に臨床検査学科が新設されるとのことで、私の1期生としての経験が生かせると思い、異動いたしました。異動後10年が経ち、今では同学科長を拝命しています。

大学で1期生として、何もないところから作り出すという作業を経験し、何とか代案を考える、臨機応変、無理なら早めに諦める(見極めを早くする)という点で生かされていると思います。また他の分野の方とも分け隔てなく交流を持てるという点は、新設学科を運営する上で非常に役に立っていると思います。

本学で刺激を受けた研究者については、生命理工学系専攻生命理工学講座センサ工医学の三林浩二先生の研究に感銘を受けました。バイオセンサーの研究は、検査分野と関わりが深く、検査を受ける際の患者の負担軽減にもなり、もっと様々な検査が簡単にできるようになれば良いと思います。東京工業大学との合併でますます活躍されることを期待しています。

2024年10月に母校が東京科学大学となり東京工業大学と統合しますが、医療と工学の融合を促進し、よりよい社会に貢献でき、誰もが知っているというような研究・技術を、世界中に発信し続ける大学になって欲しいと思います。

『「科学の進歩」と「人々の幸せ」とを探究し、社会とともに新たな価値を創造する』という東京科学大学のミッションに対して、臨床検査で今まで以上に予防医学に力を注げば、人々の健やかな生活を支える基盤となると考え、東京科学大学と検査技術学専攻の発展を祈念しています。

### むかし噺 其ノ六

## 旧帝大に肩を並べる大学を目指し尽力



東京医科歯科大学  
名誉教授  
江藤 一洋 (えとう・かずひろ)

1941年大分県生まれ。1967年東京医科歯科大学歯学部卒業。1971年に同大学院歯学研究所研究科修了。卒業後、本学小児歯科学に入局。1973年にアメリカ国立衛生研究所(NIH)に3年間留学。1976年に帰国して小児歯科講師となり、1978年より歯学部顎顔面発生機構研究部門教授。1997年から2005年まで歯学部長。退官後、2006年から2013年まで日本歯科医学会会長。公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構副理事長として共用試験の公的化を進めるとともに、一般社団法人アジアデンタルフォーラム理事長として、日本の歯科医療をアジアに広げる活動を行っている。

### 政治家より歯科医師に!

私は大分県出身で、父が職業軍人、母が小学校の先生で、政治家になりたいと思っていました。しかし体力がなかったため、政治家は無理だと思い、医者か歯医者にならうか…と思いつき、1年浪人して、金沢大学医学部、山口県立医科大学(現在は山口大学医学部)、そして2期校の本学歯学部を受験してすべて合格し、東京に住んでみたかったので、本学に進学しました。国府台ではテニス部に入り、部活中心の生活で、英語の単位を落としそうになり、慌てて英語の論文を読んで訳すという課題を提出して落第を免れました。後に歯学部長になった時に、「落第しそうになったヤツでも歯学部長になれる」と揶揄されたことが懐かしいです。

大学卒業後は大学院に進み、大学院卒業後は小児歯科学教室に入局し、1973年からアメリカ国立衛生研究所(以下、NIH)に留学しました。もともと発生学に興味があり、NIHに留学した3年間で、自分は臨床の未知よりも研究センターで進もうと決心ができました。アメリカでもきちんとした成果を残して「お客様」で終わらないようにと、自分が研究したい分野の世界トップ研究者に会い、ケンブリッジ大学を何度も訪れたりして、最終的にはオリジナルな研究成果を発表できたことで、国際的にも通用する力が備わったと自信を持てるようになりました。

帰国後は小児歯科の講師となり、1978年に新しく創設

される発生学分野の教授にならないかという話が来ました。同時期に長崎大学小児歯科の教授の話や、NIHに戻ってこないかというオファーをもらいましたが、最終的に本学に残ることに決めました。

### 府中への移転、東京大学との統合…

2007年に私が退官するまでに、本学の移転の話は時折議論になりましたが、一番大きく話題になったのは、1975年に朝日新聞で「医科歯科大学移転決定」と報道されたことでしょうか。移転先は通称「旧関東村」で、調布飛行場の西側にある広大な米軍住居跡で、府中市が医療機関を誘致したいと考えており、本学に白羽の矢が飛んできたわけです。1978年には当時の吉田久学長が学内の意見をヒアリングしましたが、敷地が狭く新しい研究施設も建てられない状態だった基礎系教室からは賛成の意見、臨床系の研究室からは、病院が府中に移転したら患者が激減して病院経営が危うくなり臨床研究も進められないとの反対意見が上がり、意見が対立し、集約は難航していました。そこに文部省から、府中に移転する場合は、国府台、御茶ノ水、駿河台地区の土地をすべて国に返上する必要があるという通達を受けて、府中への移転の話はなくなりました。個人的には、移転してしまったら「西東京大学」医学部、歯学部として地味な存在になっていたと思うので、移転しなくて良かったと考えています。

また、2001年6月に当時の遠山敦子文部科学大臣が経済諮問会議に提出した「大学(国立大学)の構造改革の方針」の中で、国立大学の再編統合や法人化、民間の経営手法導入、第三者評価による競争原理の導入、世界最高水準の大学づくり「トップ30」構想の4つを柱とする「遠山プラン」が話題になりました。この影響で、本学と東京大学が統合・合併するのでは…という話もありましたが、結局うまくいかずに終わりました。

### 大学院の重点化がなぜ早く進んだか

大学院の重点化には力を注ぎました。これまで大学の教員だったシステムを大学院の教員にシステムを変更することで最初に大学院の重点化を実施したのが東京大学法学部、そして医学部、旧七帝大という序列順に進んでいきました。そこで本学はどうするか?ということになりましたが、本学の序列というのは、旧七帝大、旧六医専の次に来る新八大の真ん中ぐらいの序列にありました。これは大学の歴史がどれだけ長いか序列に大きく影響していました。本学医学部の設置は1944年なので東大などと比べればずっと歴史が浅いわけで、設置順から言うと後回し

にされてしまいます。ところが、歯学部は歴史が古く国立大歯学部でナンバーワンだったので、医科歯科の歯学部は先んじて重点化しないといけない、医科歯科を重点化する場合は歯学部から…という非公式の意見が聞こえてきました。そんな流れの中で、医学部は動きがとりにくかったため、私がいろいろな人と早く重点化を実現させてほしいと交渉している間に、大学院の名称を「医歯学総合研究科」にすれば、旧七帝大と同時期に他に先んじて、大学院の重点化が実現できるというアイデアを思いつきました。もちろんこれには大学内でも反対意見が多く、学内の調整に走り回って議論を重ね、遂に実現することができました。これによって本学のプレゼンスは維持・向上したと思っています。

### アジアとの交流で大学ランキングが上昇

もう一つ、歯学部長時代に尽力したのは国際交流です。私が歯学部長時代に一番多いときはタイからの留学生20数名をトップに、全留学生数は125を超えていました。どうやって留学生が増えたかという点、1995年ごろから、日本学術振興会の国際交流事業として援助してもらった仕組みを構築して、以前から交流があった台湾、中国、韓国だけでなく、タイのチュラロンコン大学の教授を毎年10人呼び、本学の教授をタイに派遣して互いに交流を深め、アメリカの大学での博士号取得よりも短期間でアメリカと同じレベルの質の高い博士号を、本学で取得できることを4、5年かけて理解してもらいました。博士号の取得者が多いというのは大学院にとっての研究力や教育力の指標として重要です。大学ランキングを上げるためには留学生の数、博士号取得者の数を増やすことが大切でした。このような努力の成果が2000年頃からの留学生の増加に繋がり、世界大学ランキングを押し上げてくれたのです。その後もタイを拠点として、ベトナム、カンボジア、ラオス、インドネシア、マレーシアなどの留学生を積極的に受け入れ、今では自国で立派な大学教授になったり、有名な臨床家になったりしています。

### 高い理念を実現する現実的な策と行動力が重要

過去にいくつもの大学統合や移転の話が勃発し、そのたびに議論を重ねては立ち消えてしまう…という試行錯誤を繰り返しましたが、東京工業大学との統合をうまく着地させて、2024年10月から東京科学大学が誕生するという大々的な構造改革を実現させた田中雄二郎学長の手腕は素晴らしいと思います。

最後に私が好きな政治家である岸信介氏の「目的にお

いては理想主義、方法においては現実主義、理想が執念を生み、現実が戦略をかき立てる」という言葉をご紹介します。岸信介という政治家は、「理想を追いかけるその道程で編み出される戦略と戦術は恐ろしく多彩であり伶俐であり、時には悪徳の光を放つ」(原彬久『岸信介－権勢の政治家』岩波書店)と評されるほど、現実的な戦略やアイデアを生みだし、実行する天才だったようです。私が歯学部長、副学長に在任中は、常にこの姿勢を忘れないようにしていました。ことに国立大学という予算消化体質の組織にいますと、理想ばかりを掲げて現実世界を顧みず、浮世離れしがちです。それを避けるためにも、大きな理念やポリシーを掲げて、それを実現させるための実行可能な戦略やアイデアを考えて行動するという姿勢を大切にしてほしいと思います。

## むかし噺 其ノ七

### 「世界の医科歯科」と 讃えられるまでの道程



東京医科歯科大学  
名誉教授

#### 田上 順次 (たがみ・じゅんじ)

1955年三重県生まれ。1980年東京医科歯科大学歯学部を卒業。1984年に大学院を修了後、東京医科歯科大学歯科保存学第一講座助手。1987年米国ジョージア医科大学に1年間留学。1994年に奥羽大学歯学部歯科保存学第一講座教授を経て、1995年、東京医科歯科大学歯学部歯科保存学第一講座教授に就任。2005年～2014年まで歯学部長、同年から理事・副学長(教育・学生・国際交流)。2017年には国際歯科研究学会から卓越した科学者に授与される賞の1つであるWilmer Souder Awardを受賞。

### 地味で簡単そう、実は奥が深いう蝕の世界へ

私は三重県生まれで自然科学、特に生物学が好きでした。受験した大学は、有名な生物学者が多い京都大学理学部と東京医科歯科大学で、どちらも合格しました。最終的には、京大で有名な教授たちと地道に研究するよりも、都会の大学でカッコよくキャンパスライフを送り、高収入な歯科医師として開業しようと考え、本学を選び1977年に入学しました。卒業後は大学院に進学し、修了後は1994年まで本学歯科保存学第一講座(現在のう蝕制御学分野)助手として本学に所属しました。

歯科保存学第一講座を選んだ理由は、当時から歯学部の花形で学生に人気なのは、インプラントや義歯、口腔外科などで、「むし歯なんて簡単な領域」と歯学部生には疎まれがちな地味な「う蝕」でしたが、指導していただいた教室の若手の先生方の強い勧誘があったからです。途中

1987年から1年間、アメリカのジョージア医科大学に留学しました。留学先にジョージア医科大学を選んだのは、当時この大学に歯の象牙質の研究において第一人者だった教授がおられて、その教室で研究をしてみたいと考えたからです。この時本学では、象牙質を酸で洗ってから材料を接着させる手法が確立されていました。この留学ではこの手法と材料が優れていることを紹介して、「象牙質を酸で洗う」ことに反対していた留学先の先生の考え方が変わり、接着性レジンを用いた虫歯治療の国際的な普及に一役買ったのではないかと思います。

### う蝕治療を変革させたレジンとの出会い

1973年に起こったオイルショックの影響を受けた石油化学メーカーが歯科材料の研究に乗り出していました。具体的には三井石油化学工業(現サンメディカル)、徳山曹達(現トクヤマデンタル)、クラレ(現クラレノリタケデンタル)などです。この中でもクラレが、新規医科・歯科材料の開発を行っており、本学の生体材料工学研究所の増原英一教授の教室との共同研究も1970年代から始まり、接着性レジンの研究が軌道に乗りました。増原先生は当時、ドイツ留学の経験もあり、先進的だったドイツの歯科材料や器械に詳しく、春になると「ドイツでは今の時期、ホワイトアスパラがおいしいんだ」と口癖のように仰っていました。増原先生のグループが接着性レジンの実用化を目指すためには、臨床現場で試用し、臨床現場での使用方法を確立する必要がありました。

当時のう蝕(むし歯)治療は、むし歯ではない健康な歯の部分までを大幅に削って従来の合金を詰めたりはめ込んだりする必要がありました。歯科保存学第一講座の教授であった総山孝雄先生は、何とか健康な歯を削らずにむし歯の治療ができないかと研究を進め、むし歯を根こそぎ削り取る必要がないことを突き止めました。

そしてクラレとの共同研究が進む中、ついに接着性レジンを使って健康な歯を削ることなく、さらにむし歯を削る部分も最小限に留めて治療をする方法を開発しました。こうして1970年代にはう蝕(むし歯)によって細菌感染した歯質を選択的に除去する方法を考案し、接着性コンポジットレジンを用いて修復を行う、審美的で痛みの少ないう蝕治療(CR接着修復法)を開発しました。

総山先生は元々、戦前は近衛兵、戦争中は陸軍の通信隊の士官として従軍、英語に堪能で、戦後はフルブライト奨学生として米国へ留学し、歯の治療用材料やその方法についての研究を推進していました。いずれも世界最先端の研究を意識したもので、教室には世界を相手にしてい

るという雰囲気に満ち溢れていました。

### アメリカ、欧州進出に成功

英語に堪能な総山先生はアメリカの歯科学会で接着性レジン研究成果を発表しましたが、画期的な研究成果にもかかわらずなかなか受け入れられませんでした。というのも、接着性レジンに歯にしっかりと接着するためには、歯の象牙質を酸で洗って表面の削りかすや汚れを除去する必要があります。この象牙質を酸で洗う「エッチング」という手法(接着の工程)は欧米の研究者からは否定され、この状況は80年代後半まで続きました。

増原先生、総山先生をはじめとする本学の接着性レジン研究成果を何とか世界の歯科臨床現場に広めようと頑張ってくれたのは共同開発者のクラレのスタッフたちで、アメリカの歯科学会での企業展示を積極的に展開したり、欧米の歯科材料を販売する業者を開拓したりと、とにかく海外で普及するように地道な努力を続けてくれました。しかし一方で接着性レジン研究成果について当初から強い関心を抱いてくれたアメリカの研究者もおり、特にカリフォルニア大学で研究経験のある臨床家は、総山先生の話聞くために来日して自宅まで訪問して直接話をきいて、その内容を自分が所属する臨床家のグループに報告し、接着性レジンを用いた治療法を広めてくれました。

こうした努力が実ったのが1990年頃で、ここから急速に接着性レジンがアメリカ、ヨーロッパ、そしてアジアにまで広がっていきました。

1990年代後半にはコンポジットレジン歯質接着性を高める研究を産学連携で展開し、象牙質プライマーの開発と歯質接着機構の解明を行いました。また接着修復材料の接着性を高い精度で評価する方法として、歯の微小領域で計測を行う微小引張り・せん断接着試験法を当教室が中心となって開発しました。この試験方法は歯科医学領域におけるスタンダードな試験法として世界各国の研究機関で採用されています。

う蝕によって脱灰した歯質を修復材料の高機能化によって自己修復する材料や、失われた歯質を再生する治療法の開発にも取り組みました。また、う蝕を早期に高い精度で発見し、疾患の進行を先制的に抑制する研究を行ったり、放射線を使わずに、可視光を用いて歯の精密な断層画像を撮影する装置を産官学連携で開発しました。

### 歯学部長、副学長時代に注力した国際化

歯学部長、副学長になってからは、「たとえどんなに、いい研究成果であっても、日本国内だけで普及活動をしてい

るだけでは、世界に認知されない。研究をして論文を書き、世界の学会や論文誌で発表すること」という経験を生かして、国際交流を盛り上げて、教員・学生の国際交流を推進し、アジアの国費留学生を積極的に受け入れました。その理由は、国費の留学生はバイトで生計を立てる必要がなく、研究をして論文を書く時間がたっぷりあるからです。日本語が得意でない留学生を受け入れるために、日本語教育を充実させました。また大学院の授業を英語で行って下手でも英語で会話することで、ミスを恐れずに自分の考えを伝えようと頑張った英語が上達した学生が増えました。

2001年のアメリカ同時多発テロ事件以降は、アメリカに留学できなくなった中東の留学生を多数受け入れました。留学生たちには、自国で使用している歯科材料を持参させて、接着性レジンとの比較をさせることで日本製品の素晴らしさを認識してもらい、自国で普及してもらいました。留学生の中には、母国で大学の教員となり、学部長、病院長の要職を務める人も多く、今でも世界大学ランキングの評価に良い影響が出ていると思います。

私の大学での約40年間は、偶然と幸運の連続でした。たまたまお世話になった先生の勧誘で専攻したむし歯治療の領域で、丁度新しい技術、材料が生まれる時期であったこと、それを世界で最初に使える環境にいたこと、出会った研究者や同僚に恵まれたこと、日本の大学が国際化を推進する時期に大学人として活動できたことなどです。自分の10年先も20年先も見通すことはできませんでした。やってきたのは、その時々で「自分のやるべきことをやる」ことを心掛けてきたのみです。

東京科学大学になることについては、東京医科歯科大学という名前がなくなってしまうことに不安を抱く海外の留学生や卒業生も多いですが、皆さんの世界を舞台にした、東京科学大学としての成果や活躍がたくさん見られるようになれば、同窓生としての大きな誇りになることでしょう。

むかし噺 其ノハ

## 世界一の歯科技工士育成という目標達成のために邁進



東京医科歯科大学  
名誉教授  
**鈴木 哲也** (すずき・てつや)

1954年静岡県生まれ。1980年東京医科歯科大学歯学部卒業後同大学大学院を修了。1997年オハイオ州立大学客員助教授、2005年岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座教授、2011年東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻口腔機能再建工学教授、2015年同大学大学院医歯理工学専攻口腔機能再建工学教授。専門は歯科補綴学。東京医科歯科大学名誉教授、広島大学客員教授、岩手医科大学非常勤講師。

### 宮大工に憧れた少年時代

私は静岡市の高校を卒業後、大学受験の1浪中に、本八幡にあった駿台予備校の寮で小説ばかり読んでいたため母親が心配して、知人に頼んで8月から中野区の歯科医院に下宿させていただきました。そのことが、東京医科歯科大学を受験したきっかけです。とても親しい歯科医院の院長が、「歯医者という職業も面白いよ！」とアドバイスしてくださり、毎日、院長夫人のおいしいお料理と住み心地のいい環境で生活しているうちに、自分自身でも「歯科医師になって開業するのも悪くない」と思うようになり、進路を工学部から変更して、本学に入学しました。その後、大学院への進学も、「今の時代は、大学院ぐらい出たほうがいいよ」との院長のアドバイスに従ったからです。浪人生活の半年間だけを過ごすつもりでしたが、居心地がよく大学院の途中まで約9年間もその下宿にお世話になりました。

入学後最初の2年間は、国府台でバレーボール三昧の毎日でした。当時のバレーボール部は人数が少なく、忙しく練習や大会に参加していました。4年上の先輩には食道外科の河野辰幸先生が私と同じライトアタッカーとして、1年下には病理の北川昌伸先生がエースとして活躍しており、さらに2年下には口腔外科の鎌田伸之先生も同じチームでした。

歯学部は卒業試験がなかったため卒業前ものんびりした雰囲気でしたが、私は実習で苦労した歯科補綴学に関心を持ち、部活の先輩の薦めもあり、全部床義歯を専門とする歯科補綴学第三講座への入局を決めました。全部床義歯はゼロから口腔全体を再構築する点で面白く、学び甲斐のある分野でした。

もともとの手先の器用さは、全くの人並みだったと思いますが、子供の頃から鎌倉や京都などのお寺に行くたびに、その建造物の巧みさ、美しさに刺激されて「宮大工」に憧

れていました。

### アメリカ留学、岩手医大、異なる環境へ

大学院には外部からも優秀な学生が集まり、とにかくどうすれば他人よりも上手になれるのか、技術に執着して必死に学んでいるうちに大学に残る道も自分には合っているのかもしれないと思い始めました。オハイオ州立大学を留学先に選んだのは、全部床義歯の世界では神様といわれたパウチャー教授がかつていらっしゃった研究室で学びたかったからです。しかし行ってみると、1997年当時のアメリカはインプラント研究が花盛りで、ウォルヘル前教授から「全部床義歯の技術は君のほうがうまい」と言われ、さてどうするかと戸惑いました。「これからはインプラントの時代だ!」と思い直して、外来でインプラント義歯の咬合分析を行っていました。私のそれまでの専門とは違う分野を学べたのは、視野を広げる上でとても役立ちました。

2005年には岩手医科大学教授に着任しました。教職員の少ない私立大学で、全部床義歯学、部分床義歯学、高齢者歯科学の講義、実習をすべて担当し、さらに卒業以来見たことさえなかった歯科医師国家試験の対策講義には大変苦慮しました。そんな中、大山喬史先生が送ってくださった、ご自身の部分床義歯の講義資料には随分と助けられました。

### 口腔保健工学専攻の新設で母校へ

その後、当時の大山喬史学長と田上順次歯学部長から、歯科技工士学校を閉校して「口腔保健工学専攻」を新設するので、戻って来て汗を流してみてもどうかと声をかけていただき、2011年に母校に戻りました。

口腔の健康・維持のため、医療分野と工学分野の知識と技術を併せ持つ世界のリーダーになり得る歯科技工士や、高度な歯科医療技術者を育成することを目的として口腔保健工学専攻を設立、軌道に乗せるために頑張りました。実際に全国で2校目となる4年制歯科技工士教育機関の設



インタビュー後に歯科技工部を訪問。懐かしいメンバーに歓迎される鈴木哲也先生(2024年6月撮影)

立に、学内外からの期待も大きいことを実感しました。また当時、進歩が著しかったインプラントやCAD/CAMに代表される歯科医療技術の進歩や、高い審美性など、歯科技工士への要求はますます高度化・多様化し始めている時代でした。

口腔保健工学専攻では、より高度な匠の技と科学技術の融合を目指した教育、多職種との協力がスムーズに行える人材養成に必要な教育が求められます。そのためのカリキュラムは、従来の専門学校教育の単なる時間延長では四大化した意義がありません。先端デジタル歯科技工への対応、グローバルへの対応、多職種連携への対応の3つをキーワードに掲げて、ほとんど毎日、杉本久美子先生や高橋英和先生など教員間での激論を繰り返し、カリキュラムの見直しを行っては、大学上層部、そして文部科学省へと説明に伺い、一步一步進んでいきました。さらに学部卒業後の進路として、大学院修士課程の設置については、当時の吉澤靖之学長の前で何度もプレゼンを繰り返してはダメを出され、やっと2015年半ばに承諾が得られました。

また、同時に閉校が決まっていた歯科技工士学校の最後の校長も兼任させていただき、それまでの歯科技工士学校本科卒業生1087名、実習科修了生509名の思いも胸に努力しました。

### 国際交流と新たな企業への進路を開拓

海外との人材交流も積極的に行いました。特に同じ4年制学科を有する台湾の台北医学大学とは2012年から双方向での研修を開始し、学生全員参加での英語のコンペティションやカービングコンテストなど、充実したプログラムを徐々に作りあげました。2013年からは「海外研修奨励賞」を活用し、毎年1名の学生がスウェーデンのヨーテボリ大学歯科技工学科や韓国釜山カトリック大学などに研修に行けるようになりました。さらに、国内外の4年制大学を集めて国際口腔保健工学コンソーシアムを立ち上げ、4年制歯科技工教育機関の教育・研究の将来展望をテーマに、第1回会議を2018年に本学で開催しました。

卒業生の進路についても、大学に残って研究者や教育者を目指す、歯科技工所で歯科技工士として活躍する以外に、一般企業への就職の門戸が広がるようにと企業への働きかけも行いました。そのために、人脈もネットワークもない企業の人事部にも飛び込み営業のようにお願いし、いかに我々の学生が有能かを説明して、卒業生の進路を一つでも多く確保しようと汗を流しました。

口腔保健工学専攻を新設するのは、大変困難な道のりでしたが、歯科技工士学校の卒業生(技友会)からも、「母

校が4年制大学に昇格することは卒業生の誇り」と背中を押していただきました。現在まで口腔保健工学専攻が何とか続いているのは、全ての同窓生に、「医科歯科卒の自分たちが、日本の、そして世界の歯科技工を常に牽引してきた」という自負があるからであり、大きな力になっていると思います。

しかし一方で、デジタル化が進む中、学部としての口腔保健工学専攻は不要だ…という意見も出て、2019年には存続の危機に瀕したこともありました。私は、「歯科は歯科医師と歯科衛生士、歯科技工士の3つが協働して初めて機能する。歯科医師側から見る歯科医療と歯科技工士側から見るそれとでは、見える風景が異なる。多様な方向からの視点こそが新たな医療の進歩につながる。世界に冠たる本学の歯学部が歯科技工を捨て去っていいのか」と大声で訴えました。

2024年10月からスタートする東京科学大学には、それぞれの積み重ねてきた歴史を尊重し、安易な廃止や中断などは極力避け、小さな分野にこそ次につながる種があると考え、多様性を重視した発展的な統合を期待したいと思います。

むかし噺 其ノ九

## 技工士学校で歯科技工を学び大学にも通って卒業企業勤務後も歯科鑄造学で母校に恩返し



元日本歯科技工士会  
副会長  
**伊藤 保太郎** (いとう・やすたろう)

福岡県生まれ。1967年東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校卒業、1968年東京理科大学理学部卒業。陸上自衛隊、ジーシーに勤務。本学非常勤講師も約30年務め、「1室式チタン鑄造機の性能と操作法」(2001年)などの研究を発表。2005年に藍綬褒章を受章。「伊藤智丹」の雅号で刻字作家として活躍中。毎日書道展の会員、日本刻字協会の審査員でもある。

### 陸上自衛隊から歯科技工士学校へ

私が東京医科歯科大学歯学部附属歯科技工士学校に入学したのは、九州の陸上自衛隊に入隊後、先輩から「レントゲン(診療放射線)技師」の資格を取ることを薦められた直後に、「歯科技工士」希望者を募集しているのを知り、「歯科技工士の資格を取るのには素晴らしいことだ!」と同じ先輩からアドバイスを受けて応募したことがきっかけでした。私が歯科技工士学校に入学した1964年頃は、自衛隊からの入学枠が3人、設けられていました。そこでまず自衛隊

の中で審査を受けて、応募者100人超の中から受験することのできる代表4人に選ばれ、最終的に自衛隊から3人合格し、合計で20人が歯科技工士学校に入学しました。入学試験には、指定された形に石膏をナイフで彫る実技試験もありました。入学資格は中卒以上で年齢が25歳以下だったと思います。その後、高卒以上で年齢制限は緩和され、筑波大学（東京教育大学、東京高等師範学校を含む）、東京学芸大学、早稲田大学、慶應義塾大学、東京理科大学その他すばらしい大学の卒業生も入学してきました。中には、東京高等師範学校を卒業後教職に就かれ、定年退職後入学された方もおられ、「自分の歯科治療で費用がかかったので、それを回収するために定年退職後入学した」と言っておられました。当時、歯科技工士は人気の職業の一つでした。授業料は無料で器具も貸与してくれて、在学中の3年間は月に700円の手当も支給され、とても恵まれていました。

### 有名な教授たちの教養科目が楽しかった！

授業は東京医科歯科大学から有名な先生が教えに来てくださって大いに刺激を受け、「自分は化学もさらに学びたい！」という気持ちが強くなり、東京理科大学に通うことを決めました。その時既に法政大学の通信教育でも学んでいたの、歯科技工士学校の試験と理科大の試験が重なり、レポートの提出も…という状況でとても忙しい日々でした。在学中は軟式テニスの試合、全学での体育祭や学内レガッタなど、学校行事も盛んでした。卒業前には九州へ卒業旅行にも行きました。

在学時代の思い出は、実習を頑張ったことです。当時実習室から、御茶ノ水駅前に立つ「名曲喫茶ウィーン」の白亜の城のような建物がよく見えて、夜になるとネオンがつき、深夜に消えるのですが、実習しているうちに「あ～もうウィーンのネオンがついた」とか、「あ～、ウィーンのネオンが消えちゃったから、終電がなくなった…」などと時計代わりにしていたのが懐かしいです。

### 就職試験対策で英語の原書を読む

卒業後は自衛隊中央病院で勤務しながら技工士学校にもよく顔を出しており、学生時代からお世話になっていた生体材料工学研究所の増原英一先生（名誉教授）が、ジーシー（歯科材料・機器の大手メーカー）に就職するように話を進めてくれました。ただし、「試験がある」と言われましたので、『Skinner's Science of Dental Materials（スキナー 歯科材料学）』というバイブル的な本の原書を取り寄せて勉強しました。結局、筆記試験はなく面接だけで合格して入社しましたが、この試験対策の勉強は、後の私の

人生にすごく役立ちました。

### 歯科鑄造用の材料にチタンの可能性を研究

入社してから約30年間、ジーシーに勤めながら母校の非常勤講師として材料学、技工学、鑄造学、品質管理などを教えました。私の専門は鑄造学で、ジーシーに入社後も鑄造に関わる仕事、特に歯科鑄造用器材の企画・研究・開発について従事することが多くありました。金、銀、パラジウムなどを用いた合金に頼ってばかりでは、高価で資源も限られていたため、何か新しい材料がないか…と暗中模索していたときに「チタン」にたどり着きました。チタンは軽量で高強度、アレルギーを起こしにくく、耐食性にも優れていましたが、まだ当時は歯科鑄造用としては知名度も低かったの、多くの先生方にご指導を頂き、学会発表や展示会などで普及に努めました。チタンは歯科用金属としてだけでなく今では歯科用インプラントの人工歯根として欠かせない素材となりましたが、その開発に長く携われたのが、私の人生の中で誇りに思えることの一つです。

### 海外への技術指導

技工士学校の非常勤講師を務める一方、大連医科大学等での技術指導にも参画しました。教務主任の石綿勝先生と大連医科大学歯学部朱新教授との出会いが発端となって、大連医科大学での技術指導が始まり、毎年、当校の夏季休暇の時期に出掛け、約2週間、歯学部の歯科医師課程と歯科技工士課程の学生および教職員に、講義・技術指導を行いました。何回目かのある日突然、「客員教授」の称号を頂きました。この会は約20年続きましたが、大学が郊外に新校舎を建設し移転したのを機に、我々の役目も終了しました。

海外に対しては、JICA（国際協力機構）等からの要請により、研修生の受け入れや数ヶ月単位で出張しての技術指導も行っていました。

2011年4月に口腔保健学科口腔保健工学専攻が新設され、2014年3月に歯科技工士学校は最後の卒業生を送り出して閉校となりましたが、私たち卒業生にとって母校が4年制大学になることは長年の悲願でしたし、とても誇らしいことでした。そして大学となって世界をリードする人材を多数輩出していることが誇りです。

### 刻字作家「智丹」として活動中

2024年10月には、東京医科歯科大学から東京科学大学となりますが、時代と共に変化していくことを受け入れなければ先には進めません。東京工業大学と一緒に、チタン

を超える新しい歯科鑄造用の材料を開発して欲しいです。私はチタンには縁が深く、定年後の楽しみで始めた「刻字」の雅号も「智丹」と名乗らせてもらっています。

母校の新しい門出を祝いながら、長い歴史の中で東京医科歯科大学の発展のために尽力した、歯科技工士学校時代の恩師や仲間がいたことを最終号に記しておきたいと思います。

むかし噺 其ノ十 & 十一

## 創立から続く卒業生たちの強い絆



元東京医科歯科大学教授・歯学部口腔保健学科同窓会さつき会会長  
**白田千代子**（はくた・ちよこ）

東京都生まれ。1972年東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業後、企業診療所に勤務。1974年東京医科歯科大学歯学部歯科保存学第2講座に入局。1978年東京都中野区中野北保健所、1986年東京都中野区鷺宮保健所、1993年東京都中野区南部保健所、2001年東京都中野区北部保健福祉センター勤務を経て、2009年東京医科歯科大学口腔保健学科教授。



元東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔健康教育学分野准教授  
**遠藤圭子**（えんどう・けいこ）

東京都生まれ。1972年東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業。1980年に慶応義塾大学卒業。2004年に歯学部口腔保健学科講師、2006年歯学部口腔保健学科准教授、2012年大学院医歯学総合研究科口腔疾患予防学分野准教授、2014年大学院医歯学総合研究科口腔健康教育学分野准教授、2017年大学院医歯学総合研究科非常勤講師（～2022年）。

歯学部口腔保健学科口腔保健衛生学専攻の前身は、1951年「口腔衛生の向上を図る女子技能者」養成のために設置された日本初の国立大学歯学部附属歯科衛生士学校です。1年制から2年制、そして大学への変遷をお話いただきました。

**白田** 歯科衛生士がどんな職業なのか、よくわかりませんが、「予防」に焦点を当てているところに共感しました。口の中は自分で見て触れることができるので、予防しやすいと思い、人気で狭き門、競争率も高かったのですが、受験しました。今では考えられませんが、受験料、授業料が無料だったのも魅力でした。

**遠藤** 知人に歯科衛生士がいたこと、アクセスが良かったことなどから受験しました。当時は歯学部附属の専門学校でしたが、歯学部と同様に、基礎授業と臨床授業が8時から17時（時には18時過ぎ）まで、みっちりあったことには「さすが！」と思いました。

**白田** 我々は20回生で、卒業後も交流を続けています。結束が強く、パワフルと言われていたように、在学中から先輩と一緒に勉強会を結成して、卒業後も途切れることなく新しい知識を吸収できるような仕組みを築きました。さらに『EGAO』というクラス雑誌を作って、完成すると会合を開いて、雑誌を読み、情報交換して時間を忘れて楽しんだこともありました。

第二保存科で学んだことを基に、地域保健行政の分野では、母子・成人・高齢者など、あらゆる世代の人を対象として口腔保健、福祉の仕事をしてまいりました。その後、大学での教育に携わることになり、この経験が大変役に立ちました。

**遠藤** 歯科医院・企業内歯科診療所に勤務した後、本学に戻って、恩師江島房子先生の指導を受けながら、教育指導にあたりました。歯学部附属病院にはロールモデルとなる歯科衛生士が配置されていなかったため、その当時から、江島先生は卒業生の配属されている病院、開業医院、会社診療所、保健所などを臨地実習の場として、現場活動の理解を促進してくれました。それを基に、時代のニーズに合わせた教育内容となるように検討し、卒業生で病院歯科や地域保健行政などに勤務する歯科衛生士に講義や見学実習などをお願いしました。その結果は、教育成果に繋がりました。同窓会との繋がりも、卒業生の協力体制の強さは、今も変わりません。

歯科衛生士学校スタート時は1年制でしたが、1959年、基礎学科の補強と臨床実習の充実を図るため、2年制へと移行しました。全国の歯科衛生士学校に先んじての改革で、他の学校よりリードして教育制度を充実させたいという意欲が学校全体にあり、早い時期から大学になってほしいとの声が上がっていました。具体化したのは、ずっと後になりますが…。

歯科衛生士学校学校長の経験がある黒崎紀正教授が歯学部附属病院長になられて改革を行い、念願であった各診療科にロールモデルとなる歯科衛生士を配置したことから、臨床での充実を図ることができました。

### 充実していた歯学部附属歯科衛生士学校の教育

**白田** 臨床科としての予防歯科の基礎を築かれた大西正雄教授の授業の中で、「予防が医療の基礎となる」、「予防歯科こそ、臨床が大切である」ことと、基礎を勉強しながら人を相手に知識を伝える方法を学ぶことが大事であるということを教えていただいたことが強く印象に残っています。学校の授業は基礎科、臨床科も、一流の教授自らが教鞭をとられ、その内容は今考えても素晴らしいものでした。



**遠藤** 口腔病理学の高木實先生も「歯科医療現場で働くのであれば、きちんと基礎から学びなさい」と入学早々の授業で、病理解剖を見せてくださったことなど、本学の教育環境はとても充実していたと思います。歯学部が学ぶような難しい内容も教えていただき、充実した2年間を過ごすことができました。今でも、過去のノートを見ると、よく勉強していたことを思い出します。

**白田** そのノートを他大学の歯学部卒業生に見ていただくと、大変驚いていたことから、本学の教育内容などの素晴らしさは理解できました。ところが、社会に出てみると、同じ医療現場で働く仲間の歯科衛生士としての職業意識が低く、私たちが口腔保健衛生の専門知識を持つエキスパートとして見てもらえずに苦勞したこともありました。そして私たちの後輩が社会人になったときに行政や大企業などの組織の中で活躍するためには、専門学校のままでは、能力がないと言われてたり、扱われてたりするなど、悲しい思いをするだろうことを痛感し、四大化してほしい気持ちが強くなりました。社会情勢や健康意識、口の健康問題の変化に伴う課題に気づき、40年ほど前から、疾患の予防だけでなく、食べる機能などについても取り上げ、同窓会と教員が協力して、実践を含むセミナーを開催したことから、その後の活動にも繋がりました。

1974年、歯周病学の木下二郎先生から、第二保存科で歯科衛生士として働くよう、依頼を受けました。第二保存科で働く中で、様々なことを学び、自信を持つことができました。特別区の中で口腔保健に関する施策がないという区より、乳歯う蝕の急増が社会問題になっているため、対応してほしいとのオファーがありました。気が進みませんでした。面接を受け、理由を面接官にはっきり伝えましたが、採用になりました。私は、この面接で「子どものむし歯の問題解決には、子育てをする親や地域社会を変えなければ成功しない」と伝えました。

**遠藤** 小児う蝕の急増が社会問題となると、それに必要なグッズや小冊子等が作られました。実は1970年代までは、口のケアを自分ですることが常識ではない時代でした。50歳になったら総入れ歯になるのが当たり前で、子どもはむし歯だらけ。小児歯科の授業で子どもの総入れ歯を見たときには驚きました。しかし、大人や社会を巻き込んだ「むし歯予防運動」のお蔭で、今では「子どものむし歯」は激減しました。これらのことは、教育にも大いに役立ちました。

**白田** 地域保健で活動できる「歯科衛生士を育てよう」ということで、同窓会を巻き込んだ勉強会も開催しました。「子どものむし歯予防運動」と同時期に、行政の仲間で

8020運動の構想の基を議論し、1980年頃には高齢者や障害児・者の口腔機能の問題、摂食嚥下問題が注目されるようになったことがきっかけです。その勉強会では、海外との交流も積極的に行い、日本の先進的な口腔保健学や技術を学ぶ留学生も増えました。このような状況の中、専門学校から大学に転換する環境が整っていったように思います。

### 大学化の実現 そして今後…

**白田** 大学化には、江藤一洋歯学部長に貢献していただきました。卒業生として要望書等を提出し、話し合いを重ね、大山喬史歯学部附属病院長とも話し合いを行いました。一方では、地域で活動をする中で、医学・歯学連携活動の重要性や保健・医療・福祉の連携が大きな課題となっていました。医学部病棟で、学生時代に実習できれば、貴重な技術を身につけて社会貢献できると思い、鈴木章夫学長に「口腔ケアの成果が出たときには、学生の実習を受け入れて欲しい」ことをお願いしました。学長から「脳神経外科に行って欲しい」との話があり、2004年8月から、口腔ケアボランティアが始まりました。

**遠藤** 卒業生のネットワークでボランティアを募ると、あっという間に50人ほど集まりましたので、グループを作り、毎週土曜・日曜午後に病棟で活動しました。医病の看護の方々は「口腔ケアを本格的に実践しよう」と企画している時期であり、我々同窓会の意向と一致し、快く受け入れていただきました。本活動は、誤嚥性肺炎の予防や摂食嚥下リハビリテーションにも繋がるような口のケアでしたから、患者さんはどんどん元気になり、それを見たご家族からは感謝の手紙や激励の言葉を沢山いただきました。さらに、本取り組みを医科系の学会でも発表し、論文としてまとめ、口腔ケアの重要性と歯科衛生士という専門職の有用性を社会にアピールしてきました。入院患者さんの口の機能と衛生状態を改善するための口腔ケアの重要性を示せたことは大きな成果です。人にとって口腔の健康は全身の健康と大きな関係があるからです。

**白田** 脳神経外科病棟で、大きな成果を出していることが話題になり、他の病棟からも口腔ケアの依頼があり、頭頸部外科、老年病内科、小児科、血液内科、循環器内科、ICUなど、ほとんどの病棟に行きました。こうして医科と歯科が連携して、患者さんの早期回復を実現するという最も嬉しい成果を出すことができました。その後、医学部附属病院の病棟での見学実習も可能となり、現在も定着しています。

**遠藤** 東京工業大学との統合に関しては、大学としても、情

報収集、話し合いの場を設けていると思いますが、上層部だけではなく、現場レベルや学生まで、お互いに言いたいことを言い合える関係を作ることが重要だと思います。予防に関するサービスや情報の提供は、人々の健康づくりに重要で、社会に求められているものであることを、私たち歯科衛生士はよく理解しています。歯や口のいわば口の健康を守る専門家です。田中雄二郎学長が、歯科衛生士、口腔保健学科をとっても重要と考えてくださっていることは、とても嬉しいことであり、統合後も継続して口腔保健の意義を広めていただきますよう、お願いしたいと思います。

**白田** 統合によって「医科歯科」という言葉が無くなってしまふのはとても寂しいです。世界に類を見ない、本学にしかない診療科の皆さまが活躍した歴史も大切にしたいです。新しい取り組みのためにすべて廃止してしまうのは残念です。世界中から注目されている留学生が集まれば、世界ランキングも上昇します。また統合後も、予防という視点で人々に寄り添いながら、保健・医療・福祉の分野で、貢献できる大学であってほしいと切に願います。

### むかし噺 其ノ十二

## 思い出深い大賀寮での ウニ産卵観察合宿



東京医科歯科大学  
名誉教授  
**和田 勝** (わだ・まさる)

1944年東京都生まれ。1969年東京大学理学部生物学科動物学専攻卒業後、1974年東京大学大学院理学系研究科動物学専門課程を修了。ワシントン大学動物学部で研究員として勤務。1975年より本学医用器材研究所(現生体材料工学研究所)助手、1984年に同大学教養部助教授、1987年より教授。2004年から2010年まで教養部長。2010年に本学退官後、NPO法人科学技術振興のための教育改革支援計画(SSIS)の広報担当理事として、Webページの作成、管理、生物学普及のために小中学校での出張授業活動などを行っている。

### 本学着任から教養部長になるまで

大学院を修了し、アメリカでポストドク生活を1年行った後の1975年11月に、東京医科歯科大学医用器材研究所(現・生体材料工学研究所)の制御機器部門に助手として就職しました。当時、ウズラの血中ホルモンの測定を行っていたので、井上昌次郎教授はラットの性周期に伴うホルモン変動を手掛けてほしいとの意向だったように思います。並行して、ウズラを使ったホルモン分泌と光周性の研究を自分の仕事として続けました。1980年頃からは、ウズラの歩行活動と鳴き声を継続的にカウントする装置を国際電子工業に作ってもらい、生物時計機構と絡めた研

究を行いました。すぐにプロモートするという口約束でしたが、8年たっても動きがなく、他所への異動を考えたのですがうまくいかず、たまたま教養部で生物学のポストが空いたので、どうかという話が井上教授と教養部の今立源太良教授の間であり、助教授として異動することに決めました。

1984年4月に国府台の教養部キャンパスに足を踏み入れたときの最初の印象は、「これが大学?隣の国府台高校よりもしょぼい」というものでした。ここは当時、「国府台牧場」と呼ばれ、学生を2年間、放牧して自由にさせておくということだったようです。大学の発行するニュースの中の新任紹介欄にそんなことを書いた記憶があります。ともかくこうして、教養部生物学教員として、1、2年生に生物学を教え、入試問題を作成するという業務が始まりました。幸いなことに、4年目で教授に昇任し、その後も授業と研究、その他の業務をこなし、2004年に教養部長に選出されました。

### ネット環境整備、ウニの産卵で学生たちと触れ合う

1992年に、講義室、化学、物理、生物の学生実験室と教官研究室の入った3階建ての古い校舎棟が解体され、代わってヒポクラテスホールが正門から入ってすぐ左手に竣工しました。その結果、インターネットへの接続環境がよくなり、各教室の視聴覚教材も充実し、黒板への板書による授業からパワーポイントを使った講義ができるようになりました。学生に予習・復習を促すため、講義で使用したパワーポイントファイルを、大学のWebサイトに載せ、学生はそこにアクセスしてダウンロードできるようにしました。後になると、講義の流れに沿ったWebページを作成し、図や動画を多く載せました。「wwwを利用した生物学自習システム」ということで、学長特別経費を獲得しました(1999年)。これと並行して、教養部のホームページも構築しました。最初はHTML言語を参考書片手に学びながら、サイトを構築していきましたが、後になるとホームページビルダーというソフトを使いました。現在の教養部のWebサイトにも、「国府台キャンパスについて」の下にある、交通アクセス、キャンパス紹介、国府台の歴史、教養部のアトスポット(最初の部分)などは、この時に作成したものです。

生物学実験が、医学科と歯学科の学生を2つに分けて、後期の木曜日と金曜日の午後の時間にあり、この間は、ほぼ付きっきりで学生と接触しているため、学生との触れ合いは多かったと思います。

その後、カリキュラム改革の一環で、少人数のセミナー

科目が置かれ、そこに「英語論文を読む」という科目を設定しました。自分で図書館に潜入し、興味のある論文を選び、レジュメを作って紹介するというのが一つのミッションでした。発表までの間、レジュメを作るためにわからないところの質問などを受け、レジュメの作成の手助けをしたので、かなり密に触れ合ったと思います。

さらにこの科目のもう一つの目玉は、館山大賀寮に泊まり、すぐ近くにあるお茶の水女子大学臨海実験所を借りて、ウニの発生を観察することでした。雌のウニを放卵させ、採卵された卵に精子を加えて受精させ、その瞬間から卵割していく発生の初期段階を観察することは、学生にとって大きな刺激になったことと思います。夜は宿舎で懇親会でした。学生の感想文を見ると、「この講義を絶対に友達に勧めます!」、「ウニの発生の観察、おもしろかった!」、「ウニの受精が意外に簡単だったのが想定外の発見」など、好意的な意見をたくさんもらうことができました。

## 潤いとアートのあるキャンパス実現と医療に芸術を導入

キャンパスでの学生との接触を深めるために、英語科の教員などとともに、図書館分館前にテーブルを置いて、夕方に懇談する機会を設けたりもしました。また、古い校舎棟が撤去されてできた法皇塚前の広場に、木製のガーデンテーブル&チェアを2セット置いて、学生がくつろいだり、お弁当を食べたりできる場所を作りました。

大山喬史元学長の東京藝術大学(藝大)とのつながりが大きかったことが縁で、六角鬼丈美術学部長や、美術教育研究室の教授であった本郷寛さんとつながりができ、教養部のカリキュラムの中に藝大の教員が講師となった「芸術」という実技を含んだ科目を設定することができました。

さらに、これが契機となって歯学部のカリキュラムの中に「医療と造形」という実習を含んだ科目がつけられました。当時教育担当理事であった歯学部の須田英明教授と、2008年に文部科学省の「教育方法の工夫改善を主とする取組(GP, Good Practice)」に応募して採択され、そのお金で塑像作成のための回転台と塑像板などを購入しました。この授業は2023年度まで続きました。

教養部キャンパスに芸術の香りを加えるために、2008年から藝大の卒業作品に教養部奨励賞を贈呈して作品を1年間借り受け、キャンパス内に展示しました。卒業作品の展覧会が藝大で1月に行われるので、何人かの教員がそれを閲覧し、藝大の先生たちとも協議をして、どの作品に贈呈するかを決めました。最初の年は4作品(トシノカラスなど)でした。大きな作品、たとえばヒポクラテスホールに入って右上の壁面にかかっている「cyclops」などは1年過

ぎでも借り受けを延長して、今でも多くの作品が国府台キャンパス内に展示されています。また、ヒポクラテスホールの2階の吹き抜けに面した壁面にフォトギャラリーとして、写真部の作品の展示もしています。

## 大学法人化に伴う教養部のリフォームで「嵐の6年」

なんといっても一番大変だったのは、大学法人化に伴う教養部のリフォームでした。教養部長になったときから法人化の波が押し寄せ、それに伴って中期計画の策定などを迫られ、教授会や運営組織の内規、教員の評価に関する内規など、ほとんどを事務部庶務掛の高見沢昭彦さんに助けってもらって作成し、教授会に諮り制定していきました。嵐のような6年間だったと思います。また、教養部の授業を短縮しようという動きに抵抗し、教養教育の大切さをアピールするシンポジウムを企画して実行するなどしました。

入試問題の作成も大変でした。毎年作成しなければならず、しかもミスは許されないからです。入試問題はこうあるべきというメッセージを込めて、問題を作成し続けました。覚えたことを吐き出すという単純な設問ではなく、あきら君が主人公の、ヒントが含まれた長文を読ませ、設問に答えさせるという形式です。この形式には賛否両論があったようですが、間違っただけではなかったと思っています。あるとき、九州の予備校の先生という方から電話があり、あまりにも他大学と違いがありすぎる入試問題だと言われました。予備校の授業で対応が難しいということのようでしたが、それはこちらの意図していることではない、と思いました。

## 真の「科学」大学として発展することを期待

医学でも歯学でもない理学(生物学)の出身者として、真の「科学」大学として発展することを期待しています。東京科学大学のWebページに掲げられた「伝統ある東京医科歯科大学・東京工業大学それぞれの専門分野のみならず、人文科学・社会科学的な視点をも含めた『科学』の発展を担い、社会とともに活力ある未来を切り拓いていくという、強い意志を表現しています」が実現することを期待しています。

医学、歯学、工学はどちらかといえば技術です。技術者は得てしてできるからやってみようという考えに陥りやすい気がします。心臓移植がそのいい例です。遺伝子改変が可能になった現在、やればできることと、やっていいことは別の問題です。人は人としてどうあるべきか、を深く考えることが教養教育の最初の一步でしょう。そういう意味で、統合して幅広くなるだろう教養部がやれること、や

るべきことは多いし、大きいと思います。

書いた内容が、「医科歯科大むかし噺」になっているかどうかわかりませんが、江戸川の向こう側で新入生を相手に頑張った教員達がいたことを思い出していただければ幸いです。

## むかし噺 其ノ十三

### 質問、雑談、パン差し入れ 賑やかな学生たちに囲まれて…



東京医科歯科大学  
名誉教授  
清田 正夫 (きよた・まさお)

1953年東京都生まれ。1975年東京工業大学を卒業後、1977年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了。1984年防衛大学校数物教室講師、1989年に東京医科歯科大学教養部助教授、1996年同教授。2014年に教養部長就任。専門は「代数学、有限群の表現論」。

## 出身校の東工大と勤務先が統合するとは…

子どもの頃から理数系が得意で、物理学を学ぼうかと思いましたが、物理学には実験があることを知り、少し面倒くさくなって、数学を専門にすることに決めました。大学は東京工業大学で、まさか自分の母校と長年勤めていた大学が統合するとは想像していませんでした。学生時代の大岡山キャンパスの思い出は、個性的な建物、校舎が多く、関東大震災後に万全の耐震設備で建てられた本館があまりの頑強さで建て替えできないというエピソードを覚えています。商店街にあった「定食処さか本」という店のとんかつをよく食べましたが、2013年に閉店したそうです。

大学院は東京大学に進み、卒業後は防衛大学校で数学を教えました。全寮制で規律正しく授業前に点呼をして出席者の人数の報告を受けてスタートするのがユニークでした。

口腔保健衛生学専攻の初期の学生たちはユニークな人物が多かったように記憶しています。私は新学科設置に伴う教員定員増により、1989年5月に本学教養部に数学助教授として着任し、看護、検査の1期生の「統計学」と「微積分」を担当しました。医学科1年生の必修科目「数学」も長年にわたって担当してきましたが、授業で重視しているのは、公式や計算法などの技術習得ではなく、論理的思考力の育成でした。ガリレオの名言である「自然という書物は数学の言葉で書かれている」に従って、自然現象学の役割を強調し、セミナー形式の選択科目で、整数論の英文テ

キストを学生に輪読させていましたが、数学科の学生以上に高いパフォーマンスを示す医学科学生が毎年何人かいて、頼もしいと思いました。

男性ばかりの防衛大学校から、女性の多い環境に来たので、最初は少し戸惑いましたが、休み時間に質問に来てくれる学生もいて、中には、「もっとおいしいパン屋さんを知っていますよ」と、私の昼食のパンを見て、新しいパン屋さんを紹介してくれたり、買って来てくれたりする学生もおり、賑やかな雰囲気になることもありました。

## 教養教育の短縮、グローバル化による英語教育

本学教養部は1965年に設置され、それ以降、医学部・歯学部学生の一般教育を担当し、初期の教養部ではいわゆる自由放任型の授業が多かったようで、学生は勉学以外に十分なゆとりある時間を持てたと聞いています。教養部は、社会情勢の変化に応じて、これまでに4回の大幅なカリキュラム改革を行ってきましたが、2011年度から開始された4回目の改革で国府台での教育が1年に短縮されました。

教養教育が1年になったことで、課題を提出させる授業が増え、国府台でのゆとりある時間は少なくなりました。2015年からグローバル化する社会に対応した新しい教養教育の構築に取り組むために、教養教育検討会議が設置されて、そこで「医療人に必要な教養教育とは何か」の議論が全学的にはじめられました。より良い教養教育を目指すためには、医学部、歯学部の学部教員と教養部教員の連携が必要不可欠だということで、湯島キャンパスの会議に出席することも増えました。当時の吉澤靖之学長から、教養部の授業の英語化を進めてほしいというミッションを授かって、各科目の担当教諭が外国人講師を招へいして英語教育にも取り組みました。

## 人間性豊かな医療人の育成を!

本学を退官後も、入試の数学問題作成をサポートしたり、東京大学教養学部で数学を教えたりしています。

私は数学を通じて、将来医療人として活躍する学生たちに深い教養を身につけ、総合的判断力を養い、豊かな人間性を形成してほしいと思いいい教壇に立ち続けました。高度な医学的専門知識を有することは、よき医療人であるための必要条件ですが、十分条件ではありません。幅広い教養に裏打ちされた豊かな人間性こそが、医療人に第一に要求されるものです。「人間性」とは定義しにくい単語ですが、簡単に言えば「他者を理解すること、また医療に則して言えば「他人の痛みを理解することではないでしょうか。

東京科学大学の「科学の進歩と、人々の幸せと。」という理

念は、豊かな人間性を養うことの重要性をわかりやすく示していると思います。どうかこの素晴らしい理念の下で、人間性豊かな医療人をこれからたくさん輩出してください。

## むかし噺 其ノ十四

### 理工学と臨床医・歯学をつなぐ 新科学開拓に期待



東京医科歯科大学  
名誉教授

山下 仁大 (やました・きみひろ)

1953年愛媛県生まれ。1977年東京大学工学部を卒業後、1982年東京大学大学院工学系研究科修了、1982～1984年マクマスター大学(カナダ)博士研究員、1984～1997年東京都立大学工学部助手、講師、助教授。この間1993～1994年ラトガースニュージャージー州立大学(アメリカ)客員准教授などを経て、1997年東京医科歯科大学医用器材研究所教授、2004～2011年生体材料工学研究所所長、2019年定年退職。2019～現在帝京大学先端総合研究機構客員教授および工学院大学先進工学部客員教授。米国セラミックス学会フルラス記念賞(1999年)、日本バイオマテリアル学会賞(2003年)などを受賞。

## 大学院重点化で整備・合理化などに取り組む

私は1997年9月に、東京都立大学より医用器材研究所教授として着任しました。その後、1999年4月に生体材料工学研究所への改組改称を経て2004年4月より生体材料工学研究所所長を拝命し、2011年まで所長を務めました。この間、1999年4月から2002年3月まで大学評議員、その後の2004年4月から2011年3月、2013年4月から2014年3月まで、合わせて合計11年間、大学評議員を務めました。

大学評議会では、大学院重点化に伴う大学院の研究科名称やロゴ、大型プロジェクトの内容などについて、医学系は鈴木章夫学長が、歯学系については江藤一洋歯学部長と大山喬史歯学部附属病院長(当時)などの議論が、印象に残っています。また、第一回目の大学評議員就任当時、4大学(本学、東工大、一橋大、東京外大)の共同カリキュラムの作成に始まり、その後、研究所所長に就任すると、4大学に設置されている8附置研究所(以下、附置研)の講演会開催や、将来構想に関する議論を、各附置研の専門領域を超えて、毎年持ち回りで行っていったことが、忙しかったけれど、良い思い出となっています。

上記のように研究所の抜本的な改組ということで、文部科学省の大学設置・学校法人審議会(以下、設置審)に諮るため、着任早々に当時の所長より辞表の仮提出を求められ、驚愕した記憶があります。その後すぐに、今度は大学の重点化に伴い、(定年退職する教授が数名いたために)3～4年先々の人事(特に教授)を計画するよう指示があり、難儀しました。

## 国立大学の法人化による厳しい人事制度改革を経験

また所長着任早々に国立大学の法人化があり、附置研として恵まれていた研究教育交付金が学長の一元管理となり、当時の感覚で前年度比50%強の研究所の配分金がカットされ、同時に全研究所教員の任期制への移行制定に伴い、所員向けに、厳しい人事問題が起こりうる旨を傳達した苦い経験を思い起こします。ただ研究所から新天地へ、研究所を上げて支援し、異動した教員の多くは教授に昇進し、学長や部局長になられた方々の業績を聞く度に、優秀な人材の宝庫であったことを誇りに思います。

## 「割愛願ひ」で優秀な人材確保に努める

所長在任中で印象に残っているのは、塙隆夫、岸田晶夫、三林浩二教授らが企画した国プロ(政府研究開発プロジェクト)の「バイオマテリアル・エンジニアリング人材養成プログラム」に採用され、5年間で5億円弱の補助を得たことです。これにより研究所が一致協力して5年間頑張り、大学院生の武者修行と称して、学内で研究発表のコンペを行い、毎年海外派遣を敢行したことが印象に残っています。

また当時は教授の採用に際しては形式的ですが、「割愛願ひ」なる慣習に従い、著名大学や国研等に赴き、快諾と共に研究所の名声を博した経験が印象に残っており、5、6名の教授を採用しました。業績は多数あり、教員は現所長の影近弘之教授を筆頭に三林浩二教授、岸田晶夫教授、玉村啓和教授や、定年退職された塙隆夫教授、由井伸彦教授たちなど、酒宴を好む方々が多く楽しい思い出ばかりです。さらに野球大会を筆頭に様々なスポーツ大会とそれに続く懇親会も研究所を上げて毎年敢行しました。

先輩教授では歯科接着剤で一世を風靡した中林宣男先生、また特に夜、研究所の運営等を相談しながら一献交わした、東洋教授や事務方の(故)仲野正氏や竹内勉氏、山戸恵秀氏など元事務長とも長時間議論を交わしたことが懐かしい思い出です。

## 今後の期待

東工大の理工学に関する研究教育は、本学の臨床科学やデータサイエンスの進歩に寄与するものと期待しています。一方、本学も専門領域を超えて環境科学やロボット工学、宇宙・海洋科学への貢献も期待しています。

生体材料工学研究所は臨床と理工学、基礎と応用の中間に位置する組織であるものと認識しています。分野としては薬理やバイオマテリアルなどのナノの世界から、バイ

オエンジニアリングの実用製品サイズや人-医工学境界の世界まで包含しています。初代学長であり、研究所長でもあった長尾優先生の“医学、工学を両輪とした歯学の発展”を旨として研究に勤しんできました。新大学においてはこれに倣って“東工大の理工学と本学の臨床科学を繋ぐ学際領域におけるデバイス開発と、新科学開拓”に大きく寄与していくものと期待しています。

## むかし噺 其ノ十五

### 基礎研究のおもしろさを 実感できる組織づくり



難治疾患研究所所長

仁科 博史 (にしな・ひろし)

1961年埼玉県生まれ。1985年東京大学理学部生物化学科卒業、1990年東京大学大学院理学研究科修了、東京工業大学生命理工学部助手、1995年トロント大学オンタリオ癌研究所博士研究員、1997年東京大学薬学部助手、1998年東京大学薬学部助教授、2005年東京医科歯科大学難治疾患研究所教授、2020年から現職。

## 着任時に感じた人事制度と研究空間の大切さ

2005年1月1日に東京大学から本学に着任しました。現在は存在しない旧3号館に研究空間を頂戴しました。着任後すぐにはスタッフを採用することは叶わず、私と一緒にきてくれた学生諸君と研究室作りを開始しました。前任地が徒歩圏であったこと、新天地を楽しむ余裕のある学生であったおかげで、無事に研究室を立ち上げることができました。懐かしい思い出です。臨床系分野と異なり、基礎系分野は教授の定年退職後、時代に応じた新たな分野を設置することが多く、どこの大学でも新任教授付きのスタッフ不足と空間不足は大きな課題となっています。私の赴任直後から、野田政樹所長らを中心にして、本課題を解決するための人事・空間改革が始まりました。様々な困難を乗り越え、現在の仕組み「新任教授は赴任直後から1-1-1の人事体制と、まっさらな研究空間が与えられる」が確立されました。希望溢れる新任教授が迅速に研究室を作ることが可能となりました。おかげで本研究所は魅力が高まり、優秀な人材をリクルートできるようになりました。先輩方の努力に感謝しています。

## 解析サービスとMTTがスタート

国立大学法人化を経て、学内外の研究者の研究をサポー

トするための各種解析サービスがスタートし、ゲノム解析室、細胞プロテオーム解析室、未来ゲノム研究開発支援室、形態機能解析室、バイオリソース支援室、構造解析室、幹細胞支援室などが設置されました。この取り組みは、2009年の「難治疾患共同研究拠点」採択で加速し、教育部・研究部の「大学院教育支援室」として、そして研究所の中心的施設として研究力を推進しています。相乗効果として、良い研究環境を求める若い世代が増え、活気のある研究所になりました。

2006年から5年間継続された「メディカル・トップトラック(MTT)」は、若手を採用し、研究所内で育成する試みとして全国的にも大きな注目を集めました。当研究所のMTTは、「若手研究者の自立的な研究環境促進」という日本版のテニュアトラックで、優秀な若手研究者を16人育成しようという試みでした。2009年から所長を務められた北嶋繁孝先生にお声がけいただき、古川哲史先生(現理事・副学長)、小川佳宏先生(現九州大学教授)と一緒に環境作りに関与させて頂きました。現在、本学で活躍中の笹野哲郎教授や、その他、全国の大学や研究所で活躍している研究者を複数輩出しました。次世代の若手研究者が他機関の教授職などのPIポジションに羽ばたいたことは大きな喜びです。この経験と実績があったからこそ、本学全体のテニュアトラックがスムーズにスタートできたと我々は自負しています。

## 一つにまとまった難治疾患研究所

2009年にM&Dタワーが完成し、駿河台キャンパスと湯島キャンパスの2箇所に分散していた研究所がようやく一つにまとまりました。長年の悲願が達成されました。新たな研究室設計は、各分野長に任されました。セキュリティを重視した壁のある研究室や、開放感を追求した壁の無い研究室など多様な研究室から成る空間となりました。

社会貢献の取り組みの一つは、今年37回目を迎えた市民公開講座です。公益財団法人文京アカデミーと一緒に、本研究所で行われている最先端の研究をわかりやすく一般市民向けに説明します。文京区の住人や文京区に勤務されている皆様の最先端の研究に対する関心は高く、毎年100名近くの参加者と盛況です。わかりやすい発表にすることをします。私も2021年のコロナ禍にオンラインで演者を務めました。「個体の大きさ、臓器の大きさ」というテーマで、大きさの視点から動物の特性を説明し、移植・再生医療における大きさの重要性について話しました。複数の鋭い質問や好意的な感想を頂き、こちらも勉強になりました。

## 生命科学と臨床医学を追求する自由な楽園

現在、研究所の教授約20名中、医師免許を有する教授は3分の1以下と減少傾向です。しかも東大や九大などの総合大学出身者からなり、本学出身者はゼロの状況です。優秀な医師研究者を増やしていくためには、若い時期に多様な価値観に触れることが大切です。臨床同様、基礎研究も面白いと思ってもらいたいと願っています。幸い、2024年10月から、本学は医学科と歯学科を主とする医療系大学から、理科系総合大学「東京科学大学」へと生まれ変わります。理学や工学などの価値観に触れる環境になり、これまでとは一味違った臨床医や医師研究者を輩出できると期待しています。

月日が経つのは早いものです。2024年1月1日で本学に着任して20年目に入りました。私は広範な研究領域を包含する「難治疾患研究所」の名前を気に入っています。いつの時代でも、どのような対象にも対応できる研究所になれるからです。「生命科学と臨床医学を追求する自由な楽園」の中で研究者が成果を上げられるように心して所長を務めています。東京科学大学の存在意義は、『「科学の進歩」と「人々の幸せ」とを探索し、社会とともに新たな価値を創造する』と定義されていますが、これを実現するために、当研究所ができることは、一義的には世界水準の研究を行う研究者集団になり、価値ある研究成果を生むこと、また、次世代の優秀な研究者を育成することだと考えます。そして大学人だけでなく、広く国民に知られる研究所になることが目標です。

## むかし噺 其ノ十六

### 「Science」誌掲載で記者会見。経験生かし広報のリーダーに



東京医科歯科大学 難治疾患研究所  
未来生命科学研究部門幹細胞制御分野 教授  
**田賀 哲也** (たが・てつや)

1959年岡山県生まれ。1982年京都大学理学部卒業。1988年大阪大学大学院医学研究科修了(医学博士)。大阪大学細胞工学センター助手、助教授を経て、1996年東京医科歯科大学難治疾患研究所教授。2000年熊本大学発生医学研究センター教授。2001年～2006年および2008年同センター長。2002年～2007年文部科学省21世紀COE拠点リーダー。2007年よりグローバルCOE拠点リーダー。2008年より東京医科歯科大学難治疾患研究所先端分子医学研究部門幹細胞制御分野教授。2013年～2018年同大学副学長(広報担当)、2018年～2020年特命副学長(国際担当)などを歴任。

## 『Science』誌初掲載で記者会見

1996年に本学に着任したご縁は、大阪大学の助手(現

在の助教)として研究を進めていた当時、色々な学会で講演をする機会がありましたので、おそらくどこかで私の発表をお聴きになった本学関係者から教授公募への応募を勧められたことでした。東京医科歯科大学は当時からレピュテーションが大変高い大学でしたので迷うことなく応募し、幸いにして教授選考セミナーを行う候補者の一人として残ることができました。時を経て私自身が教授選考に携わる機会ができた際には、論文発表に加えて学会発表などで印象的な若手研究者の方々に応募を勧め、難治疾患研究所の活性化を意識する立場となりました。その意味もあり、指導している大学院生が研究成果を発表する際には、ジョブトークという意識も込めてスライドの作成指導や発表練習会を入念に行っています。

私と一緒に着任した博士研究員(ポスドク)は一人だけでしたが大変優秀で、現在、九州大学の医学研究院・医学部の教授をしています。彼の精力的な研究推進と、私の着任後に大学院生として入学してきた学生さんや、企業・他大学から研究に加わった若手の方々の寄与で、円滑に研究室を立ち上げられたことに感謝しています。

1999年に私たちの研究成果が『Science』誌に掲載された際、本学医学部の先輩教授に「記者会見をしよう」と勧められ、その折に、東京医科歯科大学での第一号の『Science』に掲載された論文だ、と聴かされたので、是非に！とお願いしました。本学最初のScience論文、というのは俄かには信じ難かったのですが、論文検索サイトによるとそのようでした。学内の小会議室に記者の皆さんが集まり研究成果を説明したところ、新聞報道があったりテレビ東京の長時間取材などが入ったりと、反響は予想以上でした。

## 一度熊本大学に出て再び医科歯科大へ

2000年に本学を辞して熊本大学に赴任しました。当時は大学教員の流動性を高めるべきという機運が全国的に高まりつつある頃でしたので、研究環境を変えてプロジェクトを展開するという点で、私自身にはあまり違和感はありませんでした。赴任先では教授を含むラボの教員は全員任期制で、成果を挙げなければ更新なし、という背水の陣ではありましたが…。鈴木章夫学長(当時)は「格下の大学に行くのか？」と仰いましたので平謝りでした。当時は文部教官という国家公務員でしたので人事上は「出向」ということでした。ついてきてくださった大学院生の皆さんには苦勞を掛けてしまいましたが、それぞれ熊本大学で良い研究を取りまとめたので、結果的には良かったと思います。

その後、2008年に再び本学に着任しましたが、「出向」

が解けた、というわけではなく、また本学関係者から教授公募に応募するように勧められた、という経緯です。難治疾患研究所は常に気にかけていましたので、活気ある状況に再び参画したいという思いはありました。その時も応募後に、幸いにして教授選考セミナーを行う段階に進むことができました。

振り返って本学最初の着任は1996年9月1日付の駿河台地区でした。その4日後に徒歩1分たらずの所にスターバックス日本第2号店となるお茶の水村田ビル店がオープンしました(日本第1号店は前月に銀座でオープン)。ラボの改装が始まったばかりの9月中はスターバックスで書類仕事をすることもあり。当時のスタバの若手店員さんの成長は著しく、程なく両手に余る人数が各々店長として都内外の新店舗に巣立っていきました。当時、難治疾患研究所の各分野は駿河台地区と湯島地区に散在していました。教授会は駿河台地区で行われましたので教授会で集まる機会があったものの、研究所構成員が日ごろ顔を合わせることは少なかったです。二度目に着任した2008年には隙間風と共に落ち葉が舞い込む湯島地区の旧3号館2階で研究室を再度立ち上げ、翌年にM&Dタワーに移転し現在に至ります。タワー内の研究所の行事などで構成員が集まることが多くなりましたが、もう少し交流機会が増えてもと思います。

## 本学の国際的レピュテーション向上に取り組む

2013年から2018年まで広報担当副学長を拝命しました。私自身にとって東京医科歯科大学はレピュテーションが非常に高い大学という認識でいましたが、この役職に就いてまず目にした評判分析会社やランキング機関の幾つかの調査結果は、必ずしもそれを示していないことに驚きがありました。

大学の名称として、東京あるいは日本の医科や歯科を標榜する大学が複数存在することや、国立大学としてあまり認知されていないこと、海外からは東京大学との違いが曖昧であることなどが原因でした。そこで国内だけでなく国外に向けたプレスリリースの強化や広報アイテムの送付、フルスペルの大学名称に加えて「TMDU」の浸透、ランキング機関への働きかけ(ランキング調査員の推薦、ランキング調査において大学名称をウェブ入力する時にTokyoのTを入れた時点でプルダウン選択肢がTMDUをアルファベット順で比較的上位に表示するなど)によって、本学の認知度が数値的に改善に向かったため、それぞれ効果があったと思います。

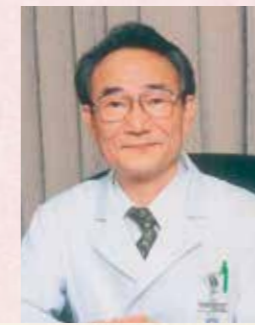
2018年から2020年まで国際担当の特命副学長を拝命中

はカバーする用務が広がり、留学生と触れ合うことも増えました。広報を担当した経験から、留学生の皆さん一人ひとりが将来の本学の広報大使という観点で様々な行事を共に経験する機会を多く持てたのは良い思い出です。

2024年10月からの東京科学大学における、難治疾患研究所は、やはり「相乗効果」がキーワードと思います。疾患の克服は今後も続く重要課題ですので、人的交流が実質的に深まって飛躍的な成果を生み出すことを期待します。

## むかし噺 其ノ十七

### 法人化などの難題にゼロから取り組む楽しみ



東京医科歯科大学  
名誉教授  
**西岡 清** (にしおか・きよし)

1939年大阪府生まれ。1964年大阪大学医学部卒業後、同大学皮膚科助手。1970年よりロンドン大学皮膚病研究所研究員。1972年より関西医科大学皮膚科講師。1978年大阪大学医学部皮膚科講師、1986年北里大学医学部皮膚科助教授、1990年東京医科歯科大学皮膚科学(1995年より環境皮膚免疫学)教授、2001～2004年医学部附属病院長。ほかに横浜市立みなと赤十字病院名誉院長、兵庫医科大学理事、中協DPC分科会長、全国医学部長病院長会議会長などを歴任。東京医科歯科大学名誉教授。

## 箱根の関を越え25年間も…

私は生粋の関西人ですが、40歳を過ぎて北里大学教授だった西山茂夫先生からご縁をいただいたことがきっかけで、箱根の関を越えて25年間も東京周辺で働くことになりました。ちょうど1980年代後半から「アトピー性皮膚炎」が社会問題になり始めて、重篤な患者が増加していたので、「皮膚免疫学」という学問分野が注目され、1990年から本学医学部皮膚免疫学教授として働き始めました。翌年の1991年にはA棟が完成し、1996年にはB棟も完成して、病院がどんどん立派になっていく過程を見ることができました。

当時の医科歯科大学には知人が一人もおらず、私を迎えてくださった本学の皆さんも「けったいな奴が来たな…」と思っていたことでしょう。しかし最初は7～8人しかいなかった医局員がすぐに増えてくれて、最終的にはあっとい間に100人超まで成長したのは、アトピー性皮膚炎、膠原病など、皮膚から免疫システムを研究するという姿勢が、当時の医学生に関心を引いたからだだと思います。現在の教授である沖山奈緒子先生も皮膚免疫学の種まきに参加してくれた優秀な学生の一人でした。また本学に着任したときからの悲願で、1992年にスタートした「皮膚科形

成外科診療班」を、1999年に「形成外科」として独立させることができたのも嬉しい思い出の一つです。

関西から来た友人知人も少ない私でしたが、微生物学の山本直樹先生、病理学の井川洋二先生、難治疾患研究所の鐔田武志先生、免疫・アレルギー学の烏山一教授などが懇意にしてくださって、次第に本学の空気に溶け込んでいくことができました。

### 大学院重点化で重鎮会議に引き込まれ…

しばらくすると当時の医学部長だった大塚正徳先生から、「大学院の重点化に本学も参画したい。そのための作戦会議を開くので出席するように」と促されて参加させていただきました。鈴木章夫先生、佐藤達夫先生などを筆頭に本学の重鎮が居並ぶ、重厚な空気の漂う会議で、私は黙々と書記を務めました。しばらくすると、当時の文部省に大学院重点化に関する本学の計画案を提出したいので、会議で決めた内容をまとめるようにと指示があり、黙々と計画書にまとめたことを鮮明に覚えています。その後、1999年から2000年にかけて大学院重点化が推進され、新しい講座が開設されたり、新しい教授が赴任されたりして、大学の雰囲気が大きく変わりました。

2001年から2004年までは医学部附属病院長として国立大学法人化に向けた病院経営の見直しや、新医師臨床研修制度の準備に取りかかりました。厚生労働省の「新医師臨床研修制度施行準備有識者会議」のメンバーになったり、病院長以外にも全国医学部長病院長会議の会長も務めることになったりしたため、大変忙しくなり、それを助けてくれたのが医学教育に関して熱心に取り組んでいた田中雄二郎先生でした。田中先生には総合診療部教授、臨床研修センター長などの大役をお願いしてもらいながら、オンライン卒後臨床研修評価システム（EPOC: Evaluation system of Postgraduate Clinical Training System）の構築や「卒後臨床研修評価機構」の設立などに尽力してもらいました。EPOCを全国の研修施設が導入することで、研修医は各施設をローテーションで移動しても、どこからでもこのシステムを使えるように設計し、自分自身の技能に対する到達度が容易に判断できることになり、研修施設の評価の一部も可能になりました。

### 新しい取り組みにゼロから参加できる幸せ

その後、本学から離れて2005年に横浜市立みなと赤十字病院が開院し、2010年まで初代病院長として働きました。その間にも中医協のDPC（Diagnosis Procedure Combination、診療群分類包括評価）評価委員会の分科

会長として、全国の病院に向けて理解を深めてもらうための討論会や講演会に東奔西走しました。

医学部附属病院長時代を振り返って思い出深いのは、「病院長室にほとんどいなかった」ということです。診察や医局のカンファレンス、病院内や外部での会議などで毎日スケジュールがいっぱいで、病院長室にいる時間がありませんでした。忙しい病院長時代でしたが、法人化、卒後臨床研修制度など、新しい取り組みにゼロから関わることができたのはとてもいい経験になりました。友人知人もいない関西出身の私を快く受け入れてくださった本学の教職員や関係者の皆様には深く感謝いたします。

東京工業大学と統合して2024年10月からは東京科学大学になりますが、私が本学に在籍していた頃から、他の大学との交流は盛んでしたので統合も順調に進んでいくと思います。ただし、東京科学大学と似た名称の大学がいくつもありますので、それらの大学とは一線を画して卓越した存在になることを期待しています。

最後に、大学広報誌『Bloom!』の最終号に、むかし噺の語り部の一人としてご指名いただいたことを光栄に思います。実は、2002年7月に発行された創刊号でも「診療室訪問」という大きな特集に登場させていただきました。私のプロフィール写真は、その時のものを使用させていただいています。

### むかし噺 其ノ十八

## オリンピック出場の経験を生かし法人化を乗り越えて世界をリードする歯学部附属病院を目指す



東京医科歯科大学  
名誉教授  
**黒崎 紀正**（くろさき・のりまさ）  
1943年栃木県生まれ。1964年東京夏季オリンピック出場。1967年東京医科歯科大学歯学部卒業。1971年同大学大学院修了後、1988年同大学大学院歯学総合研究科総合診療歯科学教授。2002年～2005年、2007年～2008年に歯学部附属病院長。本学名誉教授。2021年瑞宝中級章を受章。

### 一緒に東京オリンピックを目指さないか？

高校の同級生が次々に進学先を決める中、2期校ゆえ受験は3月半ば過ぎでした。地方での知名度はほぼゼロなのに、いわゆる高度成長に合わせるかのようにまず歯学部で20人増となり80人が15回生として入学したのは1961年のことでした。授業料は9,000円、個人情報なんていうコト

ばさえ聞いたこともないのどかな時代、入試面接では「君の身長・体重ならボート部で頑張れ」と言われ、ボート部からは「一緒に東京オリンピックを目指さないか」と勧誘され、早速入部することになりました。戸田コースで、冬場は国府台での陸上トレーニングと合宿に合宿を重ね、ボート漬けの日々を過ごしました。

4年生の時に、向後隆男君（16回生）と「かじなしペア」で全日本選手権で優勝し、東京オリンピックに参加することになりました。

抜けるような青空、男子2列目最内側で入場した10月10日の開会式はまさに圧巻でした。満員の観客でスタンドが埋め尽くされ、大きな歓声と、人々の喜び、期待、興奮の入り混じった熱気であふれ、戦後初めて日本全体が一つにまとまって明るい未来に向かっていくように感じました。代々木の選手村の設備や食事も充実し、まだまだ戦後のなごりが残る時代に夢のようでした。競技では、敗者復活戦で敗退し、外国選手との大きな実力差を感じましたが、国際的に活躍する一流の選手たちと闘えただけでも貴重な経験でした。

### 実家に戻る予定が病院長に…

1967年、歯科保存学の大学院に進学しました。学生時代にボート部で忙しく、大変だったろうと、やさしく声をかけてくださった先輩がいたからです。もちろん修了したら実家に戻ろうと考えていました。

ところが当時は歯学部の新設が続き、先輩方が次々と新設歯科大学に赴任され、人手が足りませんでした。そこで、私も手伝いをする事になりました。もちろん、今では死語になっている、御礼奉公ではありません。こうして結局、ずるずると2008年の定年まで、本学に奉職することになってしまったのです。

1982年には、歯学部附属病院に新設された総合診療部に移り、最終的には1999年の医歯学総合研究科の新設に伴い、総合診療歯科学分野に落ち着きました。

2002年には歯学部附属病院長を担当しました。そしてすぐに、患者さんにやさしい、わかりやすい病院を目指して、診療科の再編を行いました。とりわけ、「これあつての医科歯科」とも言える学生の臨床教育に、質の低下が生じないように、細心の注意を払いました。

法人化に伴って、着任された亀田隆明理事にも、貴重なアドバイスをいただき、事務職員の皆さんにも多大な協力をしてもらいました。事務サイドの全面的な支援は、「これが本学の原動力」と思えるほどで、その手堅さには目を見張るものがありました。昼間には固い話をし、夜はしば

しば一杯やりながら自由に話し合いをしたものです。これこそ昭和・平成のやり方で、貴重なものでした。

地の利、人の和こそ医科歯科の最大の強みで、将来にわたって生かしてもらいたいと思います。そして御茶ノ水側の外壁には医科歯科（病院）と大きく高く掲げ続けたいものです。